柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第98集

西 岩 野 3

― 新潟県柏崎市 西岩野遺跡第７次発掘調査（確認調査）報告書 ―

２０２０
（令和２年）

柏 崎 市 教 育 委 員 会

西 岩 野 3

― 新潟県柏崎市 西岩野遺跡第７次発掘調査（確認調査）報告書 ―

２０２０
（令和２年）

柏 崎 市 教 育 委 員 会

序

柏崎市の中心市街地より北東へ約6㎞離れた所に岩野台地と呼ばれる小高い丘があり、この丘の上からは柏崎平野を広く見渡すことができ、平野の先には米山を望むこともできます。西岩野遺跡は、この岩野台地上に広がる弥生時代後期を中心とした遺跡です。

平成29年度（2017年度）に行った県道改良工事に伴う発掘調査では、弥生時代の大型掘立柱建物、勾玉や管玉、ガラス玉を副葬する弥生時代の方形周溝墓、古墳時代前期の円形周溝墓も見つかりました。これらは、弥生時代から古墳時代にかけて、日本列島の広い範囲で権力構造や葬制が変化していく様子の一端を西岩野遺跡の中でみることができるということで、大きく注目されたところであります。

柏崎市教育委員会では、遺跡の評価と今後の取扱いを検討するための資料を得ることを目的に、西岩野遺跡の広い範囲で確認調査を実施しています。調査を行うに当たっては、調査対象地の土地所有者の皆様方から御理解と御協力をいただきながら適切に調査を進めております。

本書は、このような経緯で平成30年度（2018年度）に行った西岩野遺跡の調査報告書です。今回の調査では華やかな調査成果はありませんでしたが、西岩野遺跡について検討していくための貴重な資料を得ることができました。今後の研究のための一助として本報告書を用いていただければ幸いです。

最後に、調査に格別なる御協力と御配慮をいただいた土地所有者の皆様と地域の皆様、御指導くださった文化庁文化財記念物課及び新潟県教育委員会並びに種々の御教示を賜った諸先生方、御協力をいただいた諸機関、発掘調査に携わった皆様や関係者各位に対し、深く感謝申し上げます。

令和2年（2020年）3月

柏崎市教育委員会

教育長　近　藤　喜　祐

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字山本、土合、長崎地内に所在する西岩野遺跡の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、国庫補助金の交付を受けて新潟県柏崎市教育委員会が調査主体として実施した。
3. 調査は、西岩野遺跡の内容把握を目的として平成 30 年度（2018 年度）に実施した。
4. 発掘調査の現場業務は、柏崎市教育委員会博物館埋蔵文化財係の職員及び非常勤職員が調査員、調査補助員として実施した。また、藤村ヒューム管（株）本社営業部柏崎営業所埋蔵文化財調査部の協力を得た。
5. 整理・報告書作成業務は、埋蔵文化財事務所（柏崎市西山町坂田）において、職員を中心に行った。
6. 調査によって出土した遺物の注記は、遺跡名と調査次数の「西岩野 7 次」、地区名、出土地点、層序、遺構名等を併記した。
7. 出土した鉄製品のX線写真撮影は（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団に依頼した。
8. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（埋蔵文化財事務所）が保管・管理している。
9. 本報告書の執筆及び編集は、調査担当の中島が行った。
10. 本書掲載の図面類の方位は全て真北である。
11. 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者の皆様から多大なるご理解とご協力を賜った。ここに厚く御礼申し上げます。
12. 発掘調査から報告書の作成においては、下記の機関及び多くの方々からご指導とご協力をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

    文化庁　新潟県教育委員会　新潟県柏崎地域振興局　（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

    山本町内会　土合町内会　長崎町内会

    笹沢正史　滝沢規朗　田海義正　禰宜田佳男　箱崎和久　橋本博文　広瀬和雄
13. 図書館等（著作権法第 31 条第 1 項に規定する図書館等をいう。）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。

凡　　例

1. 本報告書で使用した方位は座標北を指す。第5次発掘調査以降に作成した地形図及び遺構図の座標は世界測地系（測地成果 2011）である。
2. 本報告で使用した土層断面の注記内の土色の表記および遺物観察表中の土器等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準拠した。
3. 本報告書では遺構の種別に以下の記号を用いた。また、遺構の説明で調査を区別するに際しては、調査次数と調査区名、遺構種別、遺構番号を併記して「7次1区SD1」等としたところがある。この場合、「－」（ハイフン）は省略している。

    ピット・柱穴＝SP　土坑・土壙墓＝SK　溝＝SD　掘立柱建物＝SB　円形・方形周溝墓＝SZ

目　　次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1
1　岩野遺跡の調査から西岩野遺跡の発見まで …… 1
2　西岩野遺跡の発掘調査の経過 …… 1
3　第7次調査に至る経緯 …… 6
4　発掘調査の体制 …… 6

第Ⅱ章　西岩野遺跡をとりまく環境 …… 7
1　地理的環境 …… 7
2　歴史的環境 …… 10

第Ⅲ章　調査の概要 …… 15
1　トレンチの設定と調査の方法 …… 15
2　基本層序 …… 15

第Ⅳ章　遺構 …… 17
1　調査区の配置 …… 17
2　調査区各説 …… 17

第Ⅴ章　遺物 …… 22
1　遺物の概要 …… 22
2　遺物各説 …… 22

第Ⅵ章　まとめ …… 23
1　はじめに …… 23
2　岩野台地の層位と地形 …… 23
3　西岩野遺跡の遺構 …… 27
4　西岩野遺跡の遺物 …… 32

≪引用・参考文献≫ …… 34
≪報告書抄録≫ …… 巻末

図版目次

図面図版

図版1　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）
調査位置図
図版2　1区遺構全体図・土層図
図版3　2区遺構全体図・土層図
図版4　3区遺構全体図・土層図
図版5　4区遺構全体図・土層図
図版6　5区遺構全体図・土層図
図版7　6区遺構全体図・土層図
図版8　7区遺構全体図・土層図
図版9　8区・9区・10区遺構全体図・土層図
図版10　西岩野遺跡第7次発掘調査出土遺物実測図

写真図版

図版11　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）1
図版12　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）2
図版13　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）3
図版14　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）4
図版15　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）5
図版16　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）6
図版17　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）7
図版18　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）8
図版19　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）9
図版20　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）10
図版21　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）11
図版22　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）12
図版23　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）13
図版24　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）14
図版25　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）15
図版26　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）16
図版27　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）17
図版28　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）18
図版29　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）19
図版30　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）20

挿図目次

第1図　西岩野遺跡の調査履歴と調査対象範囲 …… 2
第2図　西岩野遺跡第2次発掘調査遺構全体図 …… 3
第3図　西岩野遺跡第5次発掘調査遺構全体図 …… 5
第4図　柏崎平野の地形と西岩野遺跡の位置 …… 8
第5図　西岩野遺跡の周辺の地形と地質柱状図 …… 9
第6図　西岩野遺跡と周辺の弥生・
古墳時代の遺跡分布図 ……14
第7図　第Ⅳ層堆積状況と遺構 ……24
第8図　西岩野遺跡の旧地形想定図 ……26
第9図　西岩野遺跡の下層遺構の分布 ……28
第10図　西岩野遺跡第5次発掘調査SB1 ……29
第11図　弥生時代後期の東日本の独立棟持柱建物・
大型建物 ……31
第12図　西岩野遺跡・岩野遺跡出土の弥生土器 …33

挿表目次

第1表　西岩野遺跡発掘調査における
基本土層対照表 ……16
第2表　西岩野遺跡遺物出土量集計表 ……22
第3表　西岩野遺跡発掘調査出土土器量集計表 …32
第4表　西岩野遺跡第7次発掘調査（確認調査）
出土遺物観察表 …… 図版10

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

1　岩野遺跡の調査から西岩野遺跡の発見まで

西岩野遺跡は、柏崎平野の海岸線沿いに続く荒浜砂丘から東へ突き出た、通称「岩野台地」の頂部に所在する。この岩野台地は県道とJR越後線によって一部が開削されており、その切り通しによって西部、中央部、東部に三分割されている。このうちの中央部が西岩野遺跡、東部が岩野遺跡として周知化されていた。遺跡が発見されたのは岩野遺跡が先であり、明治時代の初期には土器が出土することが知られていたようである。しかし、埋蔵文化財包蔵地として周知化されたのは、昭和47（1972）年に柏崎市教育委員会（以下、「市教委」）が分布調査を実施した結果によるものである。その後、岩野台地では宅地造成工事が計画され、昭和49（1974）年に市教委が部分的に発掘調査を行った。この調査では縄文時代中期中葉から後葉を主体とした土器や石器、土偶等が出土した。同時期のものとみられる竪穴住居も4基検出され、岩野台地に縄文時代中期の集落が営まれていたことがわかった。この調査では、他にも弥生時代から中世の遺物も出土しており、弥生時代のものでは中期の山草荷式や後期後半の北陸系の土器を確認することができる。なお、この調査の報告書では現在の西岩野遺跡の範囲である岩野台地の中央部までを岩野遺跡として括っているが、遺跡範囲について詳細な記述はされていなかった。

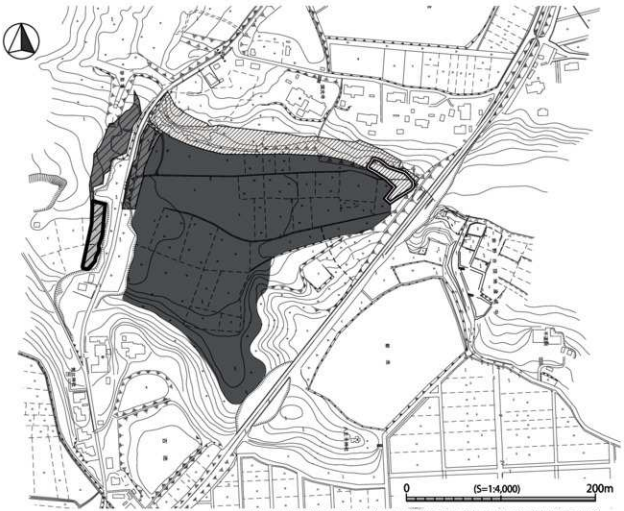
西岩野遺跡は、昭和58（1983）年度に新潟県教育委員会（以下、「県教委」）が行った詳細分布調査により周知化された。しかし、遺跡は砂丘砂に厚く覆われているため地表下の様相は判然とせず、遺跡の時期や範囲は明確にされていなかった。そして、当時すでに一般地方道荒浜安田線（現荒浜中田線）の改良工事が始まっており、西岩野遺跡の範囲とされた部分でも大規模な掘削工事が予定されていたため、発掘調査が行われることとなった。

2　西岩野遺跡の発掘調査の経過

1）第1次発掘調査から第2次発掘調査

昭和58（1983）年、一般地方道荒浜安田線（現荒浜中田線）の改良工事における西岩野遺跡の取扱いについて、市教委と事業を担当する新潟県柏崎土木事務所は協議し、昭和60（1985）年度に試掘調査（第1次発掘調査）を行うこととなった。5か所の試掘坑で調査を行い、遺跡の東端部に設定した試掘坑で遺構や遺物を検出した。その後、遺跡の取扱いについて協議を行ったが、道路法線内の遺跡の現状保存は困難とされ、翌昭和61（1986）年に記録保存のため約800㎡を対象に本発掘調査（第2次発掘調査）を行うこととなった。

この調査では、新砂丘砂層の直下の中世から近世の遺構のほか、それより下位で弥生時代後期のものとみられる幅4.6ｍを超える大溝（ＳＤ57）や住居（ＳＩ60）、土坑（ＳＸ50）等が検出された。大溝から時代を決定できる遺物は出土しなかったが、その上面に掘られたＳＸ50から弥生時代後期後半の土器がまとまって出土しており、大溝もこれとほぼ同様の時期のものであろうと想定された。住居は

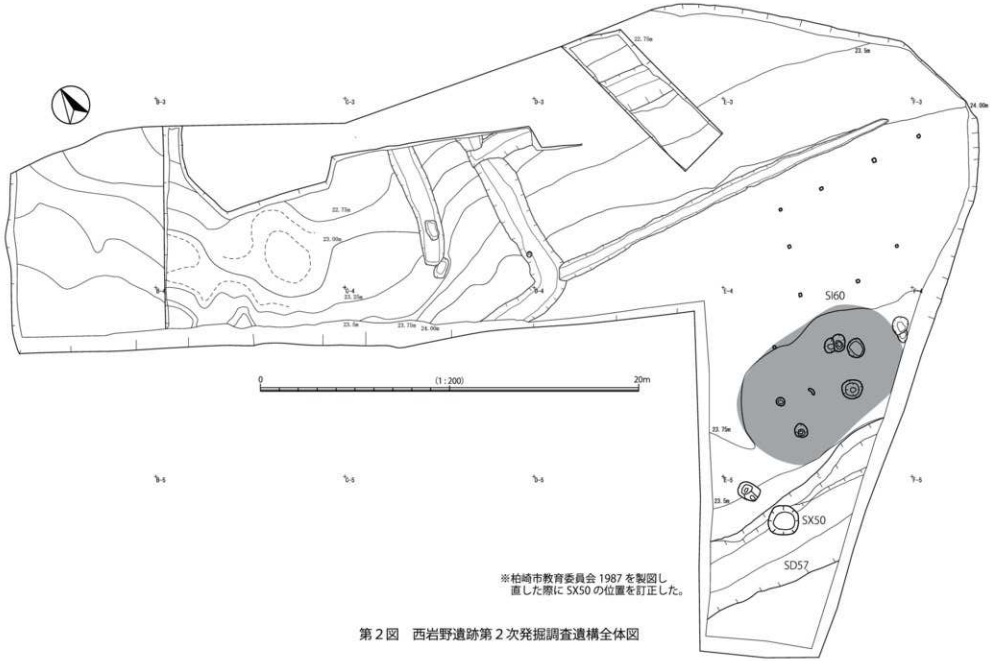


昭和54年道路改良工事荒浜安田新道線平面図(柏崎土木事務所)を製図・加筆

	調査名	調査期間	調査面積	調査成果	備考
	詳細分布調査	S58 (1983)		遺跡を発見	
	第1次発掘調査 (試掘確認調査)	S60.9.26～10.3 (1985)	(5)		
	第2次発掘調査 (本発掘調査)	S61.6.3～7.23 (1986)	800㎡	大溝・住居・土坑 弥生土器・ヒスイ	[柏崎市教委1987]
	第3次発掘調査 (試掘調査)	H26.5.20～10.21 (2014)	61.3㎡ (15)	遺跡範囲拡大	[柏崎市教委2015]
	第4次発掘調査 (確認調査)	H28.9.7～9.8 (2016)	19.9㎡ (4)	溝・土坑・ピット	[柏崎市教委2017]
	第5次発掘調査 (本発掘調査)	H29.7.10～12.21 (2017)	900㎡	大型建物・方形周溝墓 環濠・円形周溝状遺構	[柏崎市教委2019a]
	第6次発掘調査 (確認調査)	H30.5.22～6.15 (2018)	140㎡ (6)	溝・土坑・大型落込み 弥生土器・土師器	[柏崎市教委2019b]
	第7次発掘調査 (確認調査)	H30.9.5～10.15 (2018)	530㎡ (10)	溝・土坑・ピット 弥生土器・他	

※調査面積の括弧内数字はトレンチ数を示す。

第１図　西岩野遺跡の調査履歴と調査対象範囲



※柏崎市教育委員会 1987 を製図し
直した際に SX50 の位置を訂正した。

第２図　西岩野遺跡第２次発掘調査遺構全体図

竪穴の掘方は確認できず、柱穴と炉とみられる焼土から構成されるもので、その周囲から多くの土器が出土していた。大溝が弥生時代後期のものと想定されたことから、西岩野遺跡は台地上に営まれた環濠集落の可能性があると指摘されることがあった。

2） 第３次調査と第４次調査

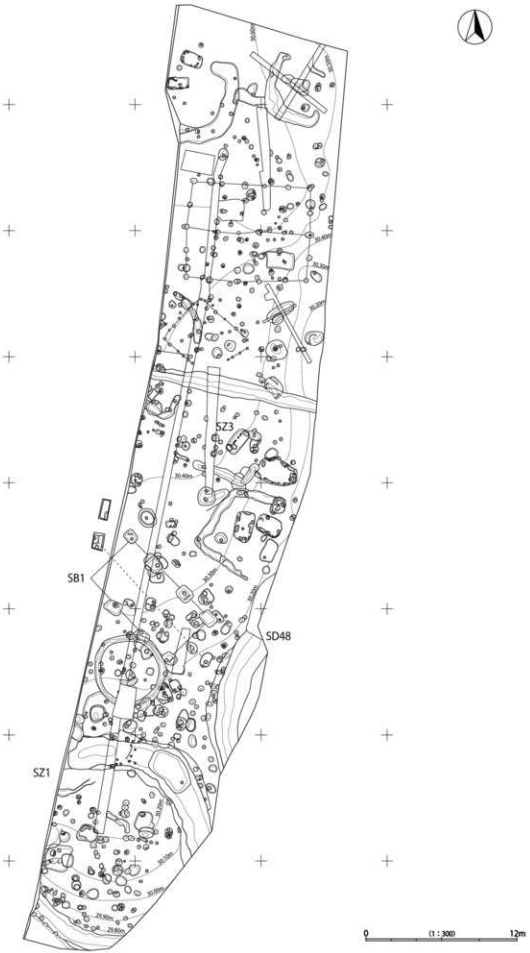
県教委が実施した平成 22（2010）年度土木工事状況調査で、岩野台地の西側を通る一般県道黒部柏崎線の道路改良工事が計画されていることを市教委は把握した。この県道は当時の西岩野遺跡の周知範囲の西側を通るもので、大きな切り通しとなっていた。市教委は事業を担当する新潟県柏崎地域振興局地域整備部（以下、「振興局」）と協議し、西岩野遺跡に隣接する範囲で試掘調査（第３次発掘調査）を行うこととした。平成 26（2014）年５月から行ったこの調査により遺跡が事業予定範囲まで広がっていることが判明したため、遺跡の取扱いについて協議した。当路線は台地を切り通して作られた道路で幅員が狭く、特に降雪期などは車のすれ違いに支障があるなど、地元町内会等が道路改良を強く要望していた。また、並走する国道８号の渋滞解消のための迂回路としても期待されるものであった。そのため、工事を中止することはできず、記録保存のための本発掘調査を行うこととなった。本発掘調査は、事業予定地を分割して南側から開始することとしたが、第３次調査のトレンチは狭小で、この調査結果だけでは調査計画の策定は困難であった。そこで初年度に本発掘調査の実施を予定した範囲を対象とした確認調査（第４次発掘調査）の実施を計画した。この調査を平成 28（2016）年９月に行い、表土層や遺物包含層等の深度を確認し、遺構面が２面あること、大型の溝状遺構が掘られていること、遺物量は少ないことなどを把握した。市教委はこの成果をもとに調査計画を策定し、振興局と本発掘調査の実施について協議した。

3） 第５次発掘調査

平成 29（2017）年、市教委は事業主体者から委託され、一般県道黒部柏崎線（山本拡幅）道路改築事業に伴う記録保存を目的とした本発掘調査（第５次発掘調査）を７月 10 日から 12 月 21 日にかけて行った。この調査で、新潟県内では初めてとなる弥生時代の独立棟持柱を伴う可能性がある大型掘立柱建物が確認された。また、弥生時代後期とみられる方形周溝墓や土壙墓からなる墓域が見つかり、方形周溝墓の１基からは勾玉をはじめとする副葬品が出土した。また、古墳時代前期の大型の円形周溝墓等が見つかった。一方、竪穴住居や平地式建物等の一般的な住居は見られず、土器の出土量も少ないことから、集落を営んだ人の居住域は他の場所にあったと考えられた。これらの調査成果を報道発表すると大きく注目を集め、同年 11 月３日に行った現地説明会には 400 名近くの見学者が訪れた。この調査成果に対し、文化財保存新潟県協議会は 11 月８日に新潟県教育委員会教育長や柏崎市長など４者へ「柏崎市西岩野遺跡に関する緊急要望書」を提出し、西岩野遺跡の現状保存を要望した。これを受けて市教委は県教委とともに新潟県を含めた事業主体者と要望書への対応について協議を行った。ただ、この段階では西岩野遺跡のごく一部でしか調査を行っておらず、遺跡をどのように取り扱うか判断することは難しかった。そこで、遺跡の内容や価値を正確に評価するための確認調査を行い、それと並行して遺跡の取り扱いについての協議を継続することとなった。

4） 第６次調査

遺跡の取扱いについて協議を継続するとともに、道路事業に伴う記録保存を目的とした本発掘調査の



第３図　西岩野遺跡第５次発掘調査遺構全体図

準備も引き続き行う必要があった。そのため、調査計画を策定するための確認調査（第６次発掘調査）を平成 30（2018）年５月から６月にかけて実施した。この調査では大型の落ち込み状や溝状の遺構が検出された。また、弥生時代後期の土器がまとまって出土する遺構も見つかったが、狭いトレンチ調査であったため住居であるかは判断できなかった。また、第５次発掘調査で検出した墓域の広がりは確認できなかった。

３　第７次調査に至る経緯

これまでの西岩野遺跡の調査は遺跡想定範囲の東と西の縁辺付近を対象としたものばかりで、その間の約 250 mにわたる平坦面は手つかずであった。また、これまでに見つかった住居跡は第２次発掘調査の一棟だけだが、この広い平坦面に居住域が広がるものと考えた。そして、第５次発掘調査のＳＤ 48 は東へ弧を描くように湾曲していたため、県道の対岸にこの溝が続いており、第２次発掘調査のＳＤ 57 とともに集落を囲む環濠になるものと考えた。そこで、環濠の広がりを把握することにより集落の規模や内容を明らかにし、それによって新潟県内の環濠集落のなかで西岩野遺跡がどのように位置づけられるか判断することとし、そのための確認調査（第７次発掘調査）を実施することを計画した。調査対象地の大部分は畑で、一部は雑木林となっていた。現在では耕作が行われていない畑も多くなっており、そのような未耕作の土地の中から調査の目的に適する場所を選定した。その後、地権者の方々に調査の目的と必要性について説明し、ご理解とご協力をいただくことができた中で、第７次発掘調査を開始した。

４　発掘調査の体制

西岩野遺跡の第７次発掘調査（確認調査）における平成 30（2018）年度の現地調査と基礎整理作業、令和元（2019）年度の発掘調査報告書の作成と刊行までの調査体制は以下のとおりである。

調査主体	柏崎市教育委員会　教育長　本間敏博（～平成 31 年３月 31 日）
	近藤喜祐（平成 31 年４月１日～）
所　　管	柏崎市教育委員会　博物館（担当：埋蔵文化財係）
総　　括	近藤拓郎（教育部長）
	高橋達也（博物館長）（～平成 31 年３月 31 日）
	小黒利明（博物館長）（平成 31 年４月１日～）
監　　理	小池久明（館長代理兼埋蔵文化財係長）
庶　　務	高野智佳（埋蔵文化財係非常勤職員）
調査担当	中島義人（主任・学芸員）
調 査 員	池田孝博（主任・学芸員）
補 助 員	徳問佳代子・池田朝子・白井かおり・加藤章恵（埋蔵文化財係非常勤職員）
調査協力	藤村ヒューム管（株）本社営業部柏崎営業所

Ⅱ　西岩野遺跡をとりまく環境

1　地理的環境

1）　柏崎平野

西岩野遺跡が所在する柏崎平野は、新潟県の中央よりやや南西寄りの海岸部に位置する。平野の周囲は東頸城丘陵の一部である標高 100 ～ 300 mの丘陵に囲まれ、これによって新潟平野や高田平野とは隔てられている。これら山塊や丘陵は柏崎平野を流れる２大主要河川である鵜川と鯖石川によって三分され、西から順に米山・黒姫山・八石山が頂点となる刈羽三山が並ぶ。八石山を頂点とする東部の丘陵は北東方向の背斜軸に沿って西山丘陵・曽地丘陵・八石山丘陵が規則的に並び、この向斜軸に沿って鯖石川の支流である別山川と長鳥川が南西に向かって流れる。黒姫山を頂点とする中央部の丘陵は、北へ向かって緩やかに高度が下がり、沖積地に接する一帯には広い中位段丘が形成される。西部は米山を頂点とした傾斜の強い山塊が海岸まで達し、沿岸部には低位・中位・高位の段丘による断崖が続いているため沖積地は少なく、海辺に砂浜はほとんど見られない。

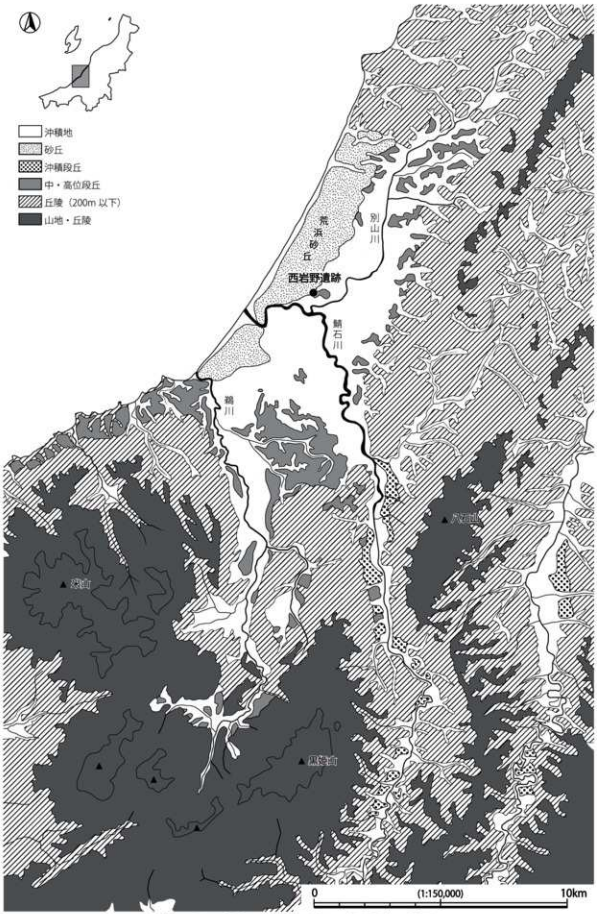
鵜川と鯖石川は山間部から北へ向かって流れ出て、沖積平野の随所に自然堤防を形成しながら蛇行して日本海に流れ込む。また、平野の北部を流れる別山川沿いでは、上流域で狭い谷底平野が続くが、中流域から鯖石川との合流点までは広い沖積地が形成されている。

柏崎平野の海岸線には発達した砂丘が南西から北東に続いている。鵜川河口から鯖石川河口の間にある柏崎砂丘は、現在は柏崎市の中心市街地にその上部を覆われている。鯖石川河口から北側に形成された荒浜砂丘はそのまま西山丘陵につながり、国上山、弥彦山へと続いている。これらの砂丘が海岸線沿いに連なることにより河川の流れは妨げられて排水不良を引き起こし、砂丘後背地の沖積地は湿地性が強いものとなっている。また河川の蛇行により各所に幾筋もの自然堤防を形成する要因にもなっている。

2）　荒浜砂丘

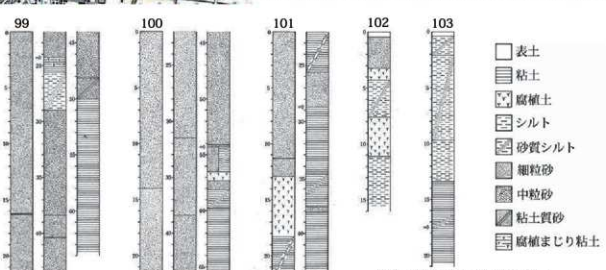
荒浜砂丘は鯖石川の河口の右岸から長さ 15 ㎞にわたって北北東へ高度を上げながら続いており、標高は最高で約 90 mに達する。この砂丘は宮川で新第三紀層の西山丘陵に連なり、海岸線に沿って国上山や弥彦山へ続いている。荒浜砂丘の地形は更新世に形成された番神砂層からなる古砂丘を基盤とし、完新世に新砂丘砂層が堆積して形作られる。この新砂丘砂層には、途中に複数の層からなる黒色腐植土層が挟まれていて、その下位を荒浜砂丘砂層Ⅰ、上位のものを荒浜砂丘砂層Ⅱと分けられている［柏崎平野団体研究グループ 1979］。そして、荒浜砂丘砂層Ⅰには縄文時代後期後半の土器が包含され、黒色腐植層からは平安時代中期の土師器が出土したとされている。また、黒色腐植層に含まれる植物遺体の放射性炭素年代が 3,100 ± 130yrBP と 2,610 ± 110yrBP を示したことから、荒浜砂丘砂層Ⅰは縄文時代後期には堆積が終了し、荒浜砂丘砂層Ⅱの形成は平安時代中頃以降に開始したとされている。遺跡付近の荒浜丘陵の頂部では 50 m以上の厚さで砂丘砂層が堆積するところもあることから、新砂丘が形成される以前の地形は現在と大きく異なっていたと考えられる（第５図）。

西岩野遺跡が立地する岩野台地と呼ばれる丘陵は、荒浜砂丘から東の沖積地へ向かって突き出た舌状



第 4 図　柏崎平野の地形と西岩野遺跡の位置

この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図を編集・加筆したものである。



柏崎市史編さん委員会編1983を改変

第５図　西岩野遺跡の周辺の地形と地質柱状図

の中位段丘である。西側の砂丘では標高 70 mを超えているが、岩野台地では 30 m前後まで下がり、別山川に接するあたりで沖積地に没している。台地の幅は広いところでも 300 mを超える程度で、その頂部には平坦面が広がり、現在まで畑として使われている。地表面は荒浜砂丘砂層Ⅱに覆われ、その下位には黒色腐植層と番神砂層からなる古砂丘があり、荒浜砂丘砂層Ⅰの堆積は確認できない。なお、番神砂層の表層部は風化により粘性が強くなっている。西岩野遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての遺構は荒浜砂丘砂層Ⅱに覆われた黒色腐植層の中に構築されており、砂丘に覆われて形成された現在の地形は当時のものとは異なっていると考えられる。

2　歴史的環境

1）　縄文時代

柏崎平野及びその周辺で確実に旧石器時代のものといえる遺跡や遺物は見つかっていない。縄文時代草創期から早期の資料もわずかで、この時期の様相は不明瞭である。前期後半から中期後半にかけて、海岸部や内陸部の広い範囲で中核的な集落が増えるとともに、小規模な集落が分散して成立し、遺跡数が増加していく。岩野台地にある岩野遺跡では中期中葉の竪穴住居４棟が見つかっており、土器は中期初頭から中葉のものが出土している。中期末葉になると遺跡数が減少していくが、後期になると再び遺跡数が増加するとともに、中核的な集落とみられるものが多くなっている。西岩野遺跡でも後期初頭の三十稲葉式土器が出土しているが、住居等は見つかっていないため集落の様相は不明である。その後、後期中葉から晩期後半まで各地に遺跡を確認することができるが、遺跡数は徐々に減少していく。また、遺物量が豊富な遺跡はあるものの、集落の様相まで確認されているのは剣野Ｂ遺跡だけである。

2）　弥生時代

弥生時代前期から中期前半の土器は小丸山遺跡と高塩Ｂ遺跡といった海浜部に立地する遺跡で見つかっている。小丸山遺跡の発掘調査では複数の土坑が検出され、その周辺で土器がまとまって出土した。しかし、集落が形成された様子は見られず、土坑も墓壙とは断定できなかったため、遺跡の性格は不明なままである。高塩Ｂ遺跡では中期初頭の土器が少量確認されているが、ここでも集落の様相は不明である。中期後半になると別山川流域に下谷地遺跡と萱場遺跡、荒浜砂丘内に小丸山遺跡、鵜川下流域に箕輪遺跡が成立する。下谷地遺跡の発掘調査は北陸自動車道の建設に先立って行われ、新潟県内でも最古級の稲作農耕集落が発見されたとして国指定史跡となった。当期の遺構では、住居跡６棟、掘立柱建物 11 棟、４基の方形周溝墓や多くの土壙墓、貯蔵穴等が見つかり、弥生農耕集落の様相が明らかとなった。また、管玉などの玉作を行っていたことも明らかとなった［新潟県教育委員会 1979］。隣接する萱場遺跡は調査範囲が狭小なため遺跡の様相は不明瞭であるが、方形周溝墓とみられる土壙と溝が見つかっている［柏崎市教育委員会 1990］。小丸山遺跡では多量の土器や石器が出土したが住居は見られず、焼土遺構や炭化物の散布を確認できただけであり、集落が営まれたとは考えにくいものであった［柏崎市教育委員会 1985］。箕輪遺跡では、ピットの集中区や楕円状に連なる溝が見つかり、住居の可能性があるとしている［新潟県教育委員会他 2002］。ここではヒスイを素材とした勾玉製作と、緑色凝灰岩を使った管玉作りを行っていた。これらの遺跡で主体となる土器は北陸系の櫛描文土器で、信州栗林系の土器が客体的に伴う状況である。また、岩野遺跡や町口遺跡では東北南部系の山草荷式の土器も出土し

ており、他地域の土器も少量だが入り込んでいるようである。当期の集落遺跡は、河川や丘陵から離れた沖積平野の中央付近の微高地上に立地するものが多いことが特徴である。

後期になると遺跡の立地に変化が生じる。低地の遺跡は丘陵裾の近くに形成されることが多くなり、丘陵上に立地する遺跡も出現するようになる。この頃の遺跡は別山川流域で多く見つかっており、鯖石川中流域や鵜川流域では少ない。低地に立地する遺跡には、戸口遺跡、琵琶島城遺跡、丘江遺跡、江ノ下遺跡、関野遺跡、大割遺跡等がある。丘陵上の遺跡としては、西岩野遺跡を初め、田塚山遺跡、西谷遺跡、野崎遺跡、坪之内遺跡、内越遺跡等がある。この時期の遺跡は、別山川流域等の柏崎平野北部に濃密に分布しており、鯖石川中流域や鵜川流域では稀薄である。

刈羽村の西谷遺跡は後背地の独立小丘陵の刈羽貝塚と一体の遺跡で、弥生時代後期中頃から古墳時代前期初頭までと比較的長期間存続する。この独立小規模丘陵は周囲との標高差は 10 m以下と低位な丘陵だが、ここで環濠が見つかっている。出土遺物には他地域から持ち込まれたとみられる土器も多いことから、広域的な地域間交流を行っていたと考えられ、柏崎平野における中核的な集落であった可能性がある。環濠は野崎遺跡や田塚山遺跡でも見つかっているが、いずれの遺跡も周辺の低地との標高差は 30 m未満とそれほど大きくなく、柏崎平野では高地性と呼べる集落は見つかっていない。田塚山遺跡は、柏崎平野南部に位置する大規模な独立丘陵上の遺跡で、丘陵の頂部は平坦で標高は 20 m程度で、周囲とは 10 m前後の標高差がある。この丘陵の南に延びる尾根を断ち切るように断面がＶ字型の溝が掘られている。溝の幅は最大で 1.7 m、最も深いところで 1.8 mに達する。周辺で住居などこの時期の遺構は見つかっていない。溝の覆土から弥生時代後期後半から終末期に位置づけられる土器の小破片が複数出土している。別山川上流域の野崎遺跡は、東西 800 m、南北 800 mの独立した丘陵上の遺跡で、周囲の沖積地との標高差は 20 ～ 25 mほどある。詳細な記録は残っていないが、深さ 1 mを超える大規模な溝が見つかっており、環濠と考えられ、覆土中から弥生時代後期の土器が出土している。内越遺跡は、別山川上流域の曽地丘陵から派生した尾根上の遺跡で、標高は 53 mから 64 mの位置に広がる。環濠は見つかっていないが、尾根上の平坦面で一辺が 9 m近くの隅丸方形を呈する大型の住居跡が見つかっている。この他にも住居の一部とみられる遺構も検出されており、複数棟の住居からなる集落があったと考えられる。坪之内遺跡ではこの時期の集落が営まれた様相は見られないが、長さ 4.7㎝ のヒスイ製勾玉が出土した。形態から弥生時代後期のものとみられる。出土地点の近くに近世頃のものとみられる溝状の山道と、これに切り合う溝によって方形に囲まれた部分がある。標高 36 m、周囲との比高差は 10 m前後の低位の独立丘陵の先端部に位置している。盛土や墓壙は失われているが、これが方形周溝墓の基底部であった可能性がある。

低地の遺跡で広範囲の調査をした例が少ないため集落の様相は明確でないが、野附・萱場遺跡では環濠とみられる溝と土塁の可能性がある高まりが検出されている。丘江遺跡では、近年の調査で竪穴住居が見つかり、隣接する川跡からは大量の弥生土器が出土している。別山川上流域では、野崎遺跡が所在する丘陵の裾で大割遺跡が発見されている。集落の様相はまだ明らかではないが、沖積地にも集落が散在していたことがうかがわれる。また、海浜部の刈羽大平遺跡と小丸山遺跡でも当期の土器がまとまって出土している。

柏崎平野のこの時期の遺跡から出土する土器は大半が北陸系のもので、近江地域に系譜を求められる土器もみられる。信州系の箱清水式土器は、これまでは剣野Ａ遺跡の事例しかなく、西岩野遺跡のものは２例目であった。この他に、内越遺跡の竪穴住居からは後北Ｃ１式の統縄文土器が北陸系の土器とと

もに出土しており、開運橋遺跡からは北部九州系の下大隅式の壷が出土している。

3） 古墳時代

古墳時代前期の遺跡は海浜部の刈羽大平遺跡や高塩B遺跡、鵜川下流域の琵琶島城遺跡、鯖石川中流域の亀ノ倉遺跡等、別山川流域では上流域の町口遺跡と長嶺前田遺跡、下流域の北田遺跡と行塚遺跡等があり、柏崎平野の広い範囲で見つかっている。別山川下流域の左岸の曽地丘陵のふもとの尾根上にある吉井行塚古墳群は、前方後円墳１基と円墳１基で構成される。隣接する行塚遺跡では管玉の未成品や石材が多数出土しており、玉造集落がこの古墳群の造営集団であったと考えられる。その後の古墳の造営は確認できていないが、吉井地区では古墳時代中期から後期にかけても集落が密集して成立しており、古墳時代を通じて柏崎平野で中核的な役割を担っていた地域であったといえる。別山川下流域の遺跡では、鯖石川との合流点に位置する角田遺跡で古墳時代中期に滑石性の玉を製作していた。工房跡とみられる竪穴状遺構が見つかっており、ここから多くの製品や未成品が出土しており、特に臼玉が多い。

別山川上流域でも、古墳時代を通じて多くの集落が成立しており、前期の遺跡としては内陸部の町口遺跡と長嶺前田遺跡、海岸部の高塩B遺跡がある。町口遺跡では、方形の竪穴住居や集落を囲繞する可能性がある溝が見つかっている。中期の遺跡は稀薄であるが、後期には畠田遺跡や坪之内遺跡、長嶺前田遺跡、高塩B遺跡がある。特に畠田遺跡では、方形の竪穴住居が見つかるとともに、中期末頃から後期前半の須恵器が複数出土しており、別山川下流域とは異なる特異性がうかがわれる。古墳時代においても、鵜川流域や鯖石川上中流域では遺跡が稀薄であり、別山川流域の優位性を見て取ることができる。

4） 古代

持統４年の庚寅年籍作成の頃に行われた越国の３分割の際には、柏崎平野が含まれる古志郡は越中国に属しており、当時の越後国の領域は阿賀野川以北であったとされる。大宝２年（702）に越中国から頸城・古志・魚沼・蒲原の４郡が越後国に割譲され、和銅５年（712）に出羽国が分置されたことにより、近世に至る越後国の領域がほぼ定まった。古志郡では、長岡市（旧三島郡和島村）の八幡林遺跡や下ノ西遺跡の付近に郡の中枢施設があったと想定されている。そして、古代北陸道は柏崎平野の中心部を通り、別山川流域から島崎川流域を経て八幡林遺跡付近に至ったと考えられる。

三嶋郡は９世紀前葉頃に、古志郡から柏崎平野を中心とした地域を分離させることによって成立したとされるが［米沢 1980］、その郡域は現在の柏崎市と刈羽郡刈羽村を合わせた範囲にほぼ一致するものと考えられる。三嶋郡が分置された経緯は明らかではないが、同時期の北陸道諸国では越前国から加賀国が分置され、その越前国と加賀国でも新たに郡が設置されていることから、北陸道諸国で国や郡の再編が行われていたようである。またこの時期には、三嶋郡域の軽井川南遺跡群や藤橋東遺跡群などで製鉄が盛んに行われており、これらの生産活動に郡衙勢力が積極的に関与することを目的として三嶋郡が設置されたとも考えられる。三嶋郡内の郷は、承平年間（931 ～ 938）に成立した『倭名類聚鈔』に「三嶋」「高家」「多岐」の３郷が記されている。また、延長５年（927）に完成した『延喜式』の兵部省諸国駅伝馬の北陸道越後国伝馬として三嶋郡には「三嶋」「多太」がある。これら史料に記された地名や記載順、式内社等の分布から、三嶋郷は鵜川流域に、高家郷は鯖石川中流域と長鳥川流域に、多岐郷は別山川流域にその範囲を想定でき、三嶋駅は三嶋郷内に、多太駅は多岐郷内にあったと推定される。なお、これまで多太駅については多々神社の名称から曾地峠の麓に比定する考えが強かった。しかし、別山川中・

上流域で古代の遺跡が数多く確認されてきたことや、各駅の比定地間の距離を考えると、別山川上流域に想定することが妥当と考えられる。

三嶋駅に関しては、箕輪遺跡から「駅家村」と記された木簡が出土しており、この付近に存在していたものと想定されている。この遺跡では、奈良・平安時代の掘立柱建物や流路が見つかっており、奈良時代には建物の方位を南北に揃えた建物が多くなり、官衙的な性格をもった遺跡であったと考えられる。また、近傍の小峯遺跡は平安時代の屋敷と考えられ、施釉陶器が多く出土している。箕輪遺跡の周辺には古代の遺跡が多く見つかっており、三嶋郡域の中心となる公的な意味合いが強い区域であったと考えられる。

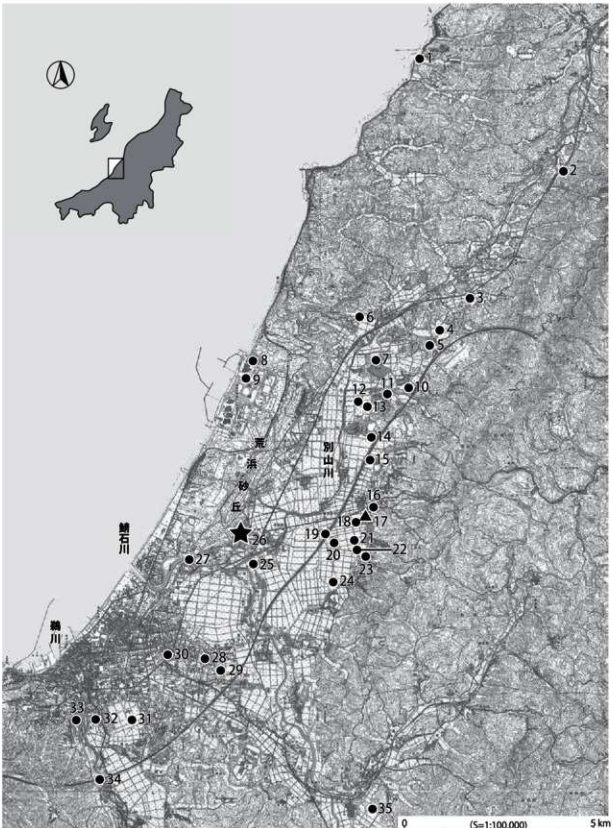
多岐郷域と考えられる別山川流域では、下流域の吉井地区で古墳時代に引き続き多くの集落遺跡が見つかっている。萱場遺跡や戸口遺跡では８世紀代の土師器や須恵器が出土しているが、調査面積が狭小なため集落の様相は明らかとなっていない。上中流域では、坂田遺跡や宮ノ前遺跡、枯木Ａ遺跡や払川遺跡など９世紀以降の遺跡が多く見つかっている。その中で、宮ノ前遺跡では、同地点で大型の掘立柱建物の建て替えを三回以上行っており、馬屋とみられる遺構もあり、灰釉陶器が多数出土していることから開発領主層に関する集落遺跡とみられる。また、海岸部の刈羽大平遺跡では８世紀初頭を前後する時期の須恵器や土師器が出土している。また、井ノ町遺跡は８世後半と９世紀中頃の遺跡で、特に９世紀代には小泊窯産の須恵器をはじめ大量の須恵器と土師器が出土している。別山川流域は古墳時代に引き続き多くの遺跡が見つかっている。この時期には、高家郷域である鯖石川中流域周辺でも、宮ノ下遺跡群の深町遺跡や宮田遺跡、長鳥川流域の亀ノ倉遺跡、馬場・天神腰遺跡、音無瀬遺跡など、多くの集落が成立するようになってくる。

このように、古代には柏崎平野の広範囲で遺跡が見つかるようになるが、その大半は９世紀以降のもので、８世紀代のものもいくつかみられる程度である。しかし、７世紀代の遺跡がほとんど見られず、別山川流域においてもごくわずかな発見例がある程度である。

５） 中世

柏崎平野に比定される荘園として、『吾妻鏡』文治２年３月12日条の「三箇国庄々未進注文」に佐橋荘・宇川荘・比角荘が記載されている。これらは鵜川と鯖石川の流域に想定され、別山川流域では荘園が確認されていない。中世後期の資料に野崎保・神田保・赤田保・原田保・武町保・吉井保・埴入保といった保名が別山川流域に残されている。北陸道の沿線に位置するこの地域は、中世においても流通や生産において重要な位置を占めたため、国衙領として存続したものと考えられる。中世後期の在地勢力としては、佐橋荘と宇川荘安田を本拠とした越後毛利氏、宇川荘上条の上条城を館とした上条上杉氏、刈羽の赤田城を根拠として別山川流域の大半を領した齋藤氏等がある。

柏崎平野では古代に引き続き多くの中世の遺跡が見つかっており、発掘調査もされている。鯖石川と長鳥川の合流点に立地する馬場・天神腰遺跡は12世紀から16世紀初頭の都市的な性格を帯びた集落遺跡とされる。また、下沖北遺跡では13世紀代、琵琶島城跡では15世紀を主体、町口遺跡では13世紀代と16世紀代の館に関わるとみられる遺構が見つかっている。



この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図を編集・加筆したものである。

1：高塩Ｂ遺跡　2：内越遺跡　3：二田沖遺跡　4：町口遺跡　5：坪之内遺跡　6：長嶺前田遺跡　7：野崎遺跡
8：刈羽大平遺跡　9：小丸山遺跡　10：畠田遺跡　11：上沖遺跡　12：払川遺跡　13：山ノ脇遺跡　14：西谷遺跡
15：枯木Ａ遺跡　16：北田遺跡　17：吉井行塚古墳群　18：行塚遺跡　19：下谷地遺跡　20：萱場遺跡　21：礼坊遺跡
22：戸口遺跡　23：吉井水上Ⅱ遺跡　24：江ノ下遺跡　25：角田遺跡　26：西岩野遺跡　27：開運橋遺跡　28：丘江遺跡
29：田塚山遺跡　30：雀森遺跡　31：箕輪遺跡　32：琵琶島城遺跡　33：剣野Ａ遺跡　34：鶴巻田遺跡　35：亀の倉遺跡

第６図　西岩野遺跡と周辺の弥生・古墳時代の遺跡分布図

Ⅲ　調査の概要

1　トレンチの設定と調査の方法

今回の確認調査は、未耕作の畑から調査の目的に適した場所を選定し、その範囲内で調査区を設定した。調査区の掘削には、0.15 m^3級のバックホウを用いた。西岩野遺跡の弥生時代後期の遺構面が地山面より上にあることは認識していたが、環濠の広がりを把握することを主な目的としており、時間的な制約があったことからバックホウで地山面まで掘り下げた。途中、住居跡と思われるような遺物や炭化物、焼土等の集中を把握した際には、途中で精査する予定であったが、今回はそのような状況にはならなかった。

地山面まで掘り下げた後は、人力で遺構精査を行い、検出した遺構にマーキングをし、検出状況の写真撮影を行った。検出した遺構は調査区ごとに連番を付し、遺構種別の略号を併記した。また、トータルステーションで観測し、遺構配置図を作成した。遺構の掘削は環濠の可能性がある大型のものを中心にサブトレンチを設定して行った。また、必要に応じて土層図を作成した。遺構外から出土した遺物は、調査区の長軸方向を２ｍ毎に区切った簡易のグリッドを用いて取り上げた。遺構内の遺物は、出土遺構や層位を記録して随時取り上げた。遺構の調査後に、各遺構や調査区全体の完掘状況の写真を撮影した。記録写真には、カラーネガフィルムとデジタルカメラを用いた。

2　基本層序

これまで西岩野遺跡で行ってきた調査で確認した基本層序の対応関係について、現段階での理解により整理したものが表１である。Ⅰ層は近世以降に堆積した砂丘砂層を主体としたものをまとめた。表土と耕作土はまとめてⅠａ層とした。Ⅰｂ層は、純粋な砂丘砂である荒浜砂丘砂層（新規砂丘砂層）Ⅱと呼ばれるもので［柏崎平野団体研究グループ 1979］、黄褐色や暗褐色を呈する未固結でサラサラした砂である。調査対象地の台地頂部では１ｍ前後の堆積しか残らないが、丘陵の斜面等では３ｍ以上の堆積を確認できるところもある。また、『柏崎市史資料集　地質篇』によると、荒浜砂丘の頂部付近で 50 ｍを超える砂層の堆積が確認されている。Ⅰｃ層はしまりがある粘質土が混じる砂層で、Ⅱ層への漸移層である。

Ⅱ層は、暗い褐色系の色調の粘質土層で、色調やしまりの強弱で２層に細分した。第２次発掘調査のⅡａ層から 16 世紀末頃の肥前陶器が出土したことから、Ⅱ層上面からⅠｃ層が近世の生活面であると想定している。

Ⅲ層は炭化物を比較的多く含む黒褐色の粘質土層である。第２次発掘調査では弥生時代の包含層としたものだが、第５次発掘調査では古代の包含層と理解しており、齟齬が生じている。引き続き対応関係の検討が必要である。

Ⅳ層は明褐色を基本とする粘質土層で、しまりがやや強い。これまで調査を行ってきたほぼ全ての調

査区で確認できており、対応関係もとらえやすいものである。基本的に炭化物は含まないものと認識している。第２次発掘調査で検出した弥生時代後期後半の土坑（ＳＸ－50）はⅣ層の上面に構築したものと考えられる。また、第６次発掘調査ではⅣ層上面で弥生時代後期の土器がまとまって出土している。第５次発掘調査ではⅣ層を除去した面で遺構検出を行ったが、土層ベルトの観察で、Ⅳ層上面から掘りこまれている遺構が多くあることを確認している。Ⅳ層については第Ⅵ章で検討する。

Ⅴ層は、黒褐色や暗褐色を呈する粘質土層で、炭化物の粒子を含むところもある。縄文期の包含層に相当するものと考えている。Ⅵ層が岩野台地を形成する基盤層の番神砂層である。Ⅵａ層はややや濁りが見られる黄褐色粘質土層で漸移層と捉えた。Ⅵｂ層は褐色や黄褐色を呈する古砂丘の風化帯である粘土層で、遺構の最終確認面である。Ⅵｃ層は固結した中粒砂からなる番神層で、大型の遺構の底部や県道の切り通しで確認することができる。

弥生時代後期の遺構を検出するにはⅣ層上面で遺構検出を行う必要があるが、今回の調査は時間などの制約があり、環濠のつながりを探ることを目的としたため、Ⅵ層上面まで掘り下げて調査を行った。

表1　西岩野遺跡発掘調査における基本土層対照表

第６次・第７次発掘調査		第２次発掘調査		第５次調査	
Ⅰ	10YR4/2 暗黄褐色砂 しまりや粘性がない砂丘砂	Ⅰａ Ⅰｂ Ⅰｃ	黒色砂層（耕作土） 腐植物を含む 茶褐色砂層 純粋な砂層 褐色粘質砂（近世遺構面） Ⅱ層との漸移的な層	Ⅰａ Ⅰｂ	黒褐色シルト（10YR2/3） 極暗褐色シルト（7.5YR2/3） 純粋な砂丘砂層
Ⅱ Ⅱａ Ⅱｂ	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土。 しまりや粘性はあるが、ぼそぼそとする。	Ⅱａ Ⅱｂ	暗褐色土（16c末肥前陶器） しまり及び粘性が強いがややもろい 暗褐色土 Ⅱａ層より黒色が強く		
Ⅲ	7.5YR3/2 黒褐色粘質土。	Ⅲａ	黒褐色土 ややしまりがない	Ⅱ	黒色シルト（10YR2/1） 粘性やや強い、しまりやや弱い。
Ⅳ	5YR3/1 暗赤褐色、明褐色土。 しまりやや強い。	Ⅲｂ	明褐色土、弥生時代の遺物が出土。 やや赤味がかった層	Ⅲａ	極暗褐色シルト(7.5YR2/3) 地山ブロック、焼土粒子含む。
Ⅴ Ⅴａ Ⅴｂ	5YR3/1 黒褐色粘質土。 5YR2/3 極暗褐色土	Ⅲｃ	暗褐色土層	Ⅲｂ Ⅳａ	黒褐色シルト（7.5YR2/2） 炭化物粒子を少し含む。 黒褐色シルト(10YR2/3) 炭化物粒子微量含む。
Ⅵ Ⅵａ Ⅵｂ Ⅵｃ	地山漸移層 7.5YR4/6 褐色粘質土 古砂丘砂層（番神層）	Ⅳ Ⅴ Ⅵ	地山漸移層（暗黄褐色土） 黄褐色粘質土層 （番神古砂丘砂風化土） 番神古砂丘砂層	Ⅳｂ Ⅴ	漸移層 暗褐色シルト(7.5YR3/4)

Ⅳ 遺　構

1　調査区の配置

これまで西岩野遺跡で行ってきた調査は遺跡の東西それぞれの縁辺付近を対象としたもので、遺跡が広がる岩野台地の中心部の様相はわかっていなかった。そこで、今回の調査では遺跡の中心部に広がる台地頂部の平坦部における遺構の展開や環濠のめぐり方を明らかにすることを目的とした。また、５次ＳＤ48が２次ＳＤ57と一体となって遺跡全体をめぐる環濠となりえるかを確認することも目的であった。そのため、住居等が築かれたと思われる台地頂部の平坦面や環濠がめぐると想定した斜面との境界付近の畑等の中から未耕作地を選定し、地権者の方々の了解を得て調査区を設定した（図版１）。１区と２区は５次ＳＤ48の延長を検出できるよう、岩野台地を南北に横断するように設定した。３区、５区、６区、９区は平坦部縁辺近くに設定したもので、環濠の巡りかたを確認することを目的とした。４区は２次ＳＤ57の延長線上に設定し、この溝の続きを確認することを目的とした。７区と８区は台地中央の平坦部の様相を確認するために選定した。調査区の幅は２ｍを基本とし、遺構の検出状況に応じて一部で拡張した。

2　調査区各説

１区（図版２）

調査対象地の平坦面の西端付近のほぼ中央に設定した。５次ＳＤ48の北側の延長を検出することを目的に設定した調査区である。現況は畑で、調査時は未耕作であった。調査区の規模は、南北方向に27.7ｍ、幅1.6ｍ前後で、調査面積は43.4㎡である。耕作による攪拌が所々で深くなっており、Ⅱ層やⅢ層が消失しているところが多い。Ⅳ層は調査区全体で確認でき、この層の上面は平坦である。Ⅴ層は調査区北部で薄く堆積し、南部では確認できなかった。Ⅵ層も上面が平坦で、ここでピットや土坑、溝を検出した。調査区壁面ではⅢ層上面とⅣ層上面から掘りこまれたピットを確認できたが、いずれもⅥ層まで達していない。ピットは直径20～30㎝のものがあり、深さは確認できるもので最大30㎝である。南端部のＳＤ１は調査区を東西に横切っている。調査区中央付近で土坑としたものは壁面で確認できないことから、地山面の窪みと判断した。

１区で出土した遺物は土師質の小破片３点のみである。１点は外面に細かいハケメを施してあり、煤が付いていることから甕の体部とみられる。

ＳＤ１　調査区南端部で検出した小規模な溝である。Ⅳ層より上から掘りこまれていることを確認できたが、Ⅲ層が消失しているため掘り込み面を確定できない。底面は凹凸が多く不正形である。覆土は黒褐色土と暗赤褐色土からなり、砂が混じらないことから弥生時代後期から古墳時代の遺構であると考える。

２区（図版３）

１区の南側に設定した。１区と同様に５次ＳＤ48のつながりを検出することを目的に南北にできる

だけ長く調査区を設定した。岩野台地の南西部に広がる平坦面で、現況は雑木林となっている。立ち木を避けるために屈曲させながら延長 97.8 m まで広げた。幅は約 2 m で、調査面積は 176.6 ㎡となった。Ⅵ層の上面はほぼ平坦で、調査区の南北での標高差は約 1 m である。検出した遺構にはピット、溝、土坑がある。ピットは調査区の全域に散在し、直径 30 ～ 40㎝ のものが多い。溝は幅 1 m近いものと 50㎝ 前後の 2 種類を確認でき、いずれも東西方向を向き、調査区を横断するものが多い。ＳＫ 20 は、検出当初は環濠の可能性があるとみてサブトレンチを設定して掘削したが、想定外に浅いものであった。平坦面で環濠を検出できなかったため、丘陵斜面への傾斜変換点から下へ向かって拡張トレンチを設定して調査した。しかし、ここでも環濠は検出できなかった。この斜面は頂部から約 1 m下がったところで再び平坦面となるが、これが植林等のために地形を改変したものかは判断できなかったが、Ⅳ層の堆積が認められないことから後世に削平されたものである可能性が高いと考える。

遺物は調査区のほぼ全域で出土したが、小破片のものばかりである。

ＳＫ 20　調査区を横断する幅 2.8 m の土坑である。検出した当初は幅が広いことから環濠の可能性があるとみて、サブトレンチを設定して掘り下げたが、深さ 5 ㎝ 程度で地山土であるⅥ層に達した。これをさらに掘り下げたが土層に変化はなく、遺構の底面であることを確認した。底面は若干凹凸があるが、全体的に平坦である。住居や溝の可能性もあるが、ここでは浅い土坑状の遺構とした。覆土は黒褐色の粘質土である。ここではⅣ層の堆積は明確に確認できず、Ⅲ層の下位に掘りこまれたものと判断した。覆土中から少量だが弥生土器の破片が出土しており、高杯や甕を確認できる。また、鉄製品も出土した。

ＳＤ 13・ＳＤ 14　幅約 1 m の溝が 1.4 m間隔でおおむね平行に走る。いずれの溝も確認面からの深さは 10㎝ 程度と浅い。調査区壁面の土層から、Ⅳ層上面から掘りこまれた大型の遺構の底部の一部と判断した。覆土は黒褐色土や灰褐色土が主体で炭化物はほとんど混じらない。ＳＤ 13 の覆土から土器が少量出土しているが、摩耗している小破片のものが多いため、器形や時期は特定できない。

ＳＤ 5　調査区南端部近くにある東西方向の溝で、Ⅳ層の下位に掘りこまれている。上面の幅は 40㎝ 前後、確認面からの深さは 60㎝ 前後である。溝の下半部は幅が 10㎝ 程度と極端に狭くなる。根株等の攪乱の可能性も考えたが、覆土は暗赤褐色土が主体でしまりが強く、溝状に東西に続いていること、同様の遺構を他の調査区でも確認できたことから遺構として扱った。遺物は出土しなかった。

３区（図版４）

調査対象地の南東部にある平坦部の縁辺に設定した。長さ 13.6 m、幅 2.0 m の調査区で、最終段階で東側の一部を拡張した。調査面積は 34.9 ㎡である。現況は畑で平坦だが、調査区北側を通る道との境で 1 m ほどの段差となっており、地形を改変していることが考えられた。調査の結果、全体的にⅡ層からⅤ層が見られず、上部が削平されていることを確認できた。Ⅵ層の上面は南へ向かって緩やかに下っているが、本来はさらに傾斜がきつかったものと考えられる。北半部では、表土直下にⅥ層があり、ここで土坑やピットを検出した。ピットを半截したところ現代のゴミが混じっていたため、攪乱であると確認できた。また、調査区中央を横断する細い溝も、Ⅰ層に似る土で埋まっているため攪乱と判断した。南半部では調査区外まで広がる大型の遺構であるＳＫ 2 を検出した。遺物は、表土中から出土した越前の擂鉢とＳＫ 2 の底部付近からまとまって出土した弥生土器がある。

ＳＫ 2　調査区南半部で検出した大型の土坑である。検出段階では黒色土からなる半円形で調査区の東側へ続く土坑と捉えた。調査区内で半截したところ、上部に黒褐色土が、下位には地山土に似た褐色や

暗赤褐色を呈する粘質土が堆積する大型の遺構であることが分かった。遺構の底部は砂岩層であるⅥc層に達し、最高位からの深さは1.2mとなる。底面は砂岩ブロックが露出しているため表面の凹凸が残り、不正形である。9層の中でも遺構底部に近いところから弥生土器がまとまって出土した。当遺構の広がりを確認するために調査区の一部を東側へ拡張したところ、直径4.3mの円形の大型土坑であることを確認した。後世の遺物は混入していないことから弥生時代後期の遺構であると判断した。

4区（図版5）

2次SD57の西側の延長線上に設定した調査区で、今回の調査対象地でもっとも東に設定した調査区である。周囲を畑に囲まれるが、調査区の現況は雑木林である。そのため、立ち木を避けるために北部で調査区を若干屈曲させた。延長24.2m、幅2.2m前後の調査区となり、調査面積は50.1㎡である。掘削は南から北へ向かって行った。南側ではⅥ層上面までの深さが0.8mほどあったが、調査区中央よりやや北側で段のようになって高まり、その北では表土直下でⅥ層を検出した。ここの遺構面の形状と調査区壁面の土層の堆積状況から、南北で立ち上がりの高さが異なる溝状遺構であると考え、これをSD1とした。また、その位置と向きから、規模と形状が大きく異なってはいるが、2次SD57の延長の可能性があると考えた。SD1の北側ではⅡ層からⅤ層が消失しており、後世に大きく削平を受けたものと考えられる。そのため、この範囲では遺構は確認できなかった。SD1の南側にはピットや土坑、小規模な溝が散在する。ピットは直径20～40cmのもので、建物や柵の構成は不明である。土坑の全形がわかるものでは、長径1mで幅60cmのものがある。遺物の出土量は少なく、包含層から赤彩した弥生土器の壷が出土したほか、甕等の小破片が見られる。

SD1　調査区中央よりやや北にあり、東西方向の溝と判断した。2次SD57の延長線上に位置しており、一連の遺構であると考えた。溝の南北で立ち上がりの高さは異なり、南側では約10cm、北側は上部が削平されており本来の高さは不明だが、現状で約0.6mが残る。溝の北側はⅡ層からⅤ層が削平により失われており、南側でもⅣ層が消失しているため本来の地形は不明である。旧地形を想定すると、北側に向かって高まる斜面があり、その裾部分を成型したものと考える。覆土は黒褐色土が主体で、炭化物の混入は少ない。このSD1と2次SD57では規模や形態が大きく異なる。また、底面の標高も4m以上差があることから、今後さらに検証が必要と考える。覆土中から遺物は出土しなかった。

5区（図版6）

丘陵頂部平坦面の北側の縁辺に設定した調査区である。現況の地形は概ね平坦な畑であるが、耕作は行っていない。やや幅の広い溝や大型の遺構を検出したことから調査区の幅を広げたため、長さ15.5m、幅4.1mの調査区となり、調査面積は63.8㎡となった。基本土層では、Ⅱ層は堆積が薄くて所々で消失しており、Ⅲ層は確認できなかった。

検出した遺構には、調査区の南東から北西へ伸びる幅1m前後の溝（SD1）、調査区北部を東西に横断する幅3mを超える溝（SD2）があり、その他に土坑やピットもある。SD1はサブトレンチを掘削し、SD2は中央のベルトを残して掘削した。その他、土坑等も半截した。遺構外から出土した遺物は、Ⅱ層から出土した縄文土器片1点である。

SD1　調査区の南東から緩く弧を描きながら北西へ向かう溝である。調査区北西部の壁面でⅠ層の下位、Ⅳ層の上位から掘りこまれていることを確認した。確認面からの深さは5cm程度であるが、本来は50cm

前後の深さがあったものと考えられる。覆土はしまりが強い黒褐色粘質土である。第２次発掘調査では中世のものとみられる溝が複数検出されており、これと関連するものとみられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ２　調査区北部を東西に横断する溝である。検出した段階では大型の遺構であり、環濠もしくは住居であると想定した。北辺はＳＤ６に切られており、南側は掘方が不明瞭なＳＫ 10 と接しているため、ＳＤ２の幅は明確でないが３ｍ前後になる。上面はⅣ層に覆われてＶ層とⅥ層を掘りこんでおり、調査区の壁面で確認できた深さは最大で約 40㎝ である。溝の底部はほぼ平坦で、覆土は炭化物の混入は確認できない黒褐色土が主体で、橙色土のブロックが混じるところが見られる。ＳＤ２の床面で検出したＳＤ５は長さ 2.7 ｍ、幅 0.8 ｍで、深さ 0.2 ｍを確認した。ＳＤ２との前後関係は確認できなかった。ＳＤ２の覆土から土器の小破片４点が出土したが、いずれも摩耗が著しく、器形や時期は不明である。

ＳＤ６　ＳＤ２の北辺に沿うように東西に掘られた溝で、ＳＤ２より新しく、上面はＳＤ２と同様にⅣ層に覆われる。上面の幅は 60㎝ で、深さ 80㎝ 前後で、断面形は細い「Ｖ」字型となる。底部付近の幅は細く、壁面や底面に凹凸が多いことから根株などの痕跡のように見え、形態は２区のＳＤ５と似ている。覆土はしまりが弱い部分が多く、橙色の地山土の細かなブロックが混じる。遺物は出土しなかった。

６区（図版７）

５区のＳＤ１が西へ続くかを確認するために設定した。５区とは約 60 ｍ離れている。現況は概ね平坦な畑であるが、耕作は行っていない。調査区の規模は長さ 20.9 ｍ、幅 1.6 ｍ、面積は 38.2 ㎡である。過去に上部を削平されており、基本土層のⅡ層からⅣ層は確認できなかった。Ⅵ層の上面は北側に向かって緩やかに下る。ＳＫ１はＶ層に似た土で埋まっており、地山面の凹凸と考えられる。ＳＫ２は不正形で浅い溝もしくは土坑で、断面で確認できる深さは 20 ㎝程度である。覆土は褐灰色土を主体としており、炭化物の混入はほとんどみられない。５区のＳＤ２と同一の遺構とは考えにくいものである。この調査区では遺物は出土しなかった。

７区（図版８）

調査対象地の中央やや西よりに設定した調査区である。丘陵頂部の平坦面に広がる畑地のほぼ中央にあたることから、旧地形でも平坦面の中心部分にあたると想定した。調査区の長さは 22.8 ｍ、幅 1.8 ｍで、調査面積は 39.0 ㎡である。調査の結果、当初の想定とは異なり、Ⅵ層上面は南から北へ向かって緩やかに下っていた。南側では基本土層の大部分が見られないことから、過去に上部を削平されたと考えられる。調査区北部の壁面では基本土層の全６層の堆積を確認できた。遺構は調査区南部で東西方向の溝や土坑、ピットを検出した。ＳＤ１は調査区を東西に横断する溝で、調査区壁面の観察によりＶ層より上から掘りこまれ、上面にⅡ層が堆積することを確認した。Ⅲ層とⅣ層の堆積が見られないことから掘り込み面を判断できない。しまりが強いがやや粗めの覆土の様相は古代以降のものと感じられた。ＳＤ１内から遺物は出土していない。ＳＫ７は長さ 1.5 ｍ、幅 0.8 ｍの土坑で、底面は凹凸がある不正計な土坑であった。掘り込み面は確認できなかった。調査区内から出土した遺物は小破片の土器が３点だけであり、器形をうかがい知れるものはなかった。

８区（図版９）

調査対象地のほぼ中央の平坦面の調査区である。５区と６区の中間付近、農道を挟んだ南側に設定し

た。平坦な畑であり、５区と６区でみられた傾斜がここで平坦面に変化していると考え、居住域が検出されることを想定した。現況は未耕作の畑である。調査区の長さは 17.4 m、幅 1.9 mで、調査面積は 34.1 ㎡である。基本土層のⅡ層とⅢ層は消失しており、北半部ではⅠ層の下にⅣ層あり、南半部ではⅠ層直下でⅥ層に達しており、過去に削平を受けていたとみられる。基盤層であるⅥ層の上面は北へ向かって下がっており、その上のⅣ層とⅤ層も同様に傾斜している。遺構はⅣ層の下位で掘りこまれるものが多い。調査区中央付近の平坦面で調査区を東西に横切る細い溝のＳＤ６を検出した。調査区北端部では幅が広くて浅い溝２条と、ＳＤ６に似る細い溝１条を検出した。遺物は土器の小破片２点が遺構外から出土した。

ＳＤ５　Ⅳ層の上面で検出したが、北側の立ち上がり部分のⅣ層を掘り下げたため、上端を検出できなかった。調査区壁面では幅 0.7 m、深さは 0.2 mの溝であることを確認できる。上面はⅠ層に覆われている。

ＳＤ２　Ⅳ層の下位に掘られた幅 1.5 m、深さ 0.2 m、調査区を横断しているため溝とした。底面に細かい凹凸が多い。覆土は黒褐色土と灰褐色土からなり、炭化物は確認できない。

ＳＤ４・ＳＤ６　調査区を東西に横断する幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.4 m前後で、幅に対して深い溝である。ＳＤ４は上面をⅣ層に覆われる。壁面や底面に凹凸が多い不正形の溝で、形態や上面をⅣ層が覆っていることで、２区ＳＤ５や５区ＳＤ５に似ている。

９区（図版９）

調査対象地の南側の丘陵頂部縁辺付近に設定した調査区で、環濠が検出されることを想定した。調査区の幅を 1.3 mで掘り進めたところ長方形の土坑を検出した。墓壙の可能性があると考え、調査区北部の一部を拡張して全形を確認した。結果として、調査区は最大幅 2.3 m、長さ 11.1 m、面積 19.6 ㎡となった。地表面から基盤層までの堆積は 0.55 mと薄く、基本土層のⅡ層は確認できず、Ⅲ層からⅤ層の堆積もそれぞれが薄いものである。遺構は他にピット、土坑がある。遺構外から土器片が出土しているが、いずれも小破片であり、器形をうかがい知れるものはない。

ＳＫ８　調査区北部で検出した。長さ 3.1 m、幅 0.7 mの隅丸長方形である。主軸は真北から西へ約 12 度傾く。規模と形態から墓壙の可能性があると考え、一部を掘り下げた。確認面からの深さは５cm 程で、底面は平坦である。覆土は地山土の細かいブロックが多く混じる暗赤褐色土が主体で、炭化物の混入は認められなかった。土器の小破片２点が出土した。

10 区（図版９）

３区の東側８mの位置に設定した調査区で、３区ＳＫ１周辺の様相を確認することを目的とした。調査区の長さは 10.2 m、幅 1.3 mで、調査面積は 12.9 ㎡である。３区と同様に上部は削平されており、表土の直下で基盤となるⅥ層を検出した。Ⅵ層の上面は南へ向かって緩やかに下っていき、調査区南端部で勾配が変化して傾斜が急になる。調査区のほぼ中央で大型の土坑を検出した。当初は２条の溝のように見えたが、大型の土坑の周囲に黒褐色土が堆積し、中央上部に地山土に似る明褐色の粘質土が堆積していることを確認した。遺構の底部には凹凸が多く不正形なことから倒木痕と判断した。当調査区で遺物は出土しなかった。

Ⅴ 遺　物

1　遺物の概要

今回の調査では10カ所の調査区の総面積509.6㎡に対して出土した土器の総重量は1288.4ｇである（表２）。遺物の分布状況には粗密があり、総重量では２区・３区・９区で多く、１㎡あたりの出土量では３区と９区が他の調査区に比べて多い結果となった。出土土器の大半は土師質の土器の小破片のものや摩耗したものである。器形や時期を把握できるものの多くは弥生時代後期後半のもので、それ以外のものも焼成の状況や胎土の特徴などから、弥生時代から古墳時代の土器とみられるものが多い。その他の時期のものでは、縄文土器や珠洲、越前、近世の陶磁器などが出土した。また、鉄製品が１点出土している。

2　遺物各説

図化したのは12点である（図版10）。１～８は弥生時代後期後半とみられるものである。１は高杯の口縁部の破片である。口径は24cmに復元でき、有段の口縁部は大きく外反し、外側に引き出した口縁端部の上面に帯状の赤彩を行う。焼成は良好で、胎土は赤褐色に発色することが他の土器と異なる特徴である。２は高杯の脚柱部で、外面に縦方向のヘラミガキを行う。３は口縁部が内湾する鉢で、底部は平底気味になり、内外面に赤彩される。調整は外面中位が縦方向、下位は斜めのヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを行う。４は有段口縁の甕で、短い口縁部が緩く外反する。外面に縦方向のハケメがあり、内面には横方向のハケメがみられる。焼成は良好で､口縁部外面の広い範囲に煤が付く。５も有段口縁の甕で、頸部の破片である。軟質で摩耗しており、調整は確認できない。６は小型の壺の頸部破片である。外反する短い口縁部をもつ。７は短頸壺の口縁部である。内外面に斜位のハケメを施し、口縁部先端はとがり気味になる。外面の一部に強く煤が付く。８は有段口縁の短頸壺である。有段部の稜が明瞭で、外面にハケ調整の痕がある。内外面に赤彩を行う。９は撚糸文の縄文土器片である。器壁が厚く、縄文時代中期から後期のものとみられる。10は珠洲の甕もしくは壺の体部破片である。叩き目は幅３cm当たり14条の平行文である。11は越前の擂鉢で、口縁端部を欠く。12は鉄製品である。（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団の協力でＸ線写真を撮影した。鉄は中心の棒状部分だけで、周囲の板状の部分は錆である。

表２　西岩野遺跡遺物出土量集計表

調査区№	長（m）	幅（m）	面積（㎡）	土器重量（g）	重量/面積（g）	主な出土遺物
1	27.7	1.6	43.4	19.1	0.44	小破片
2	97.8	2.1	176.6	531.2	3.01	器台・壺・甕・鉄製品等
3	13.6	2.0	31.9	293.6	9.20	鉢・甕
4	24.2	2.2	50.1	87.2	1.74	壺
5	15.5	4.1	63.8	52.8	0.83	
6	20.9	1.6	38.2	0.0	0.00	
7	22.8	1.8	39.0	51.9	1.33	小破片
8	17.4	1.9	34.1	0.5	0.01	小破片
9	11.1	1.3	19.6	243.3	12.41	小破片
10	10.2	1.3	12.9	8.8	0.68	小破片
合計			509.6	1288.4	29.65	

Ⅵ まとめ

1　はじめに

西岩野遺跡では、平成29年度（2017年度）に行った第５次発掘調査で弥生時代後期の大型掘立柱建物が新潟県内で初めて見つかり大きな話題となった。他にも、副葬品を伴う方形周溝墓を含む墓域と古墳時代前期の円形周溝墓も見つかり、弥生時代後期から古墳時代前期の葬制や祭祀の変遷を垣間見ることができる遺跡として重要性が指摘された。このような成果を受けて、遺跡の全体像を把握することを目的に今回の第７次発掘調査が計画され、実施した。

第７次発掘調査を行うにあたっては、５次ＳＤ48と２次ＳＤ57が弥生時代後期の環濠で、これらが岩野台地上の集落を囲むものと想定していた。そして、環濠の全体像を把握することにより、環濠集落としての西岩野遺跡の規模を明らかにすることを目的としていた。しかし、第５次発掘調査区の対岸に設定した調査区で環濠を検出できず、２次ＳＤ57も岩野台地の縁辺部をめぐるようには続かず、当初の想定通りの結果を得ることはできなかった。また、岩野台地の中央に広がる平坦地では住居等の居住に関する遺構が見つからず、大型掘立柱建物や墓域を造営した集団の生活の場を確認することはできなかった。

このように、今回の確認調査では当初の目的を達成することができなったが、今後行う予定の調査を前にいくつかの課題を見つけることができた。ここではその課題について検討し、まとめとしたい。

2　岩野台地の層位と地形

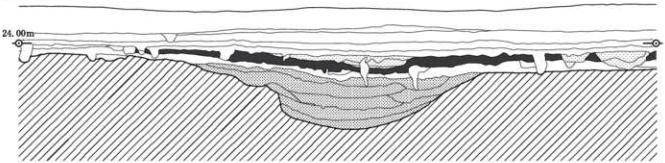
1）Ⅳ層と遺構の関係

第７次発掘調査を行うにあたって、５次ＳＤ48と２次ＳＤ57が同時期の遺構であるという前提で、これらが岩野台地上の集落を囲む環濠となるものと考えた。しかし、これまでの西岩野遺跡の発掘調査で出土した遺構や遺物の様相や土層の関係を検討していく中で、基本土層のⅣ層を境にして遺構の構築時期を分けて考える必要があることがわかった。

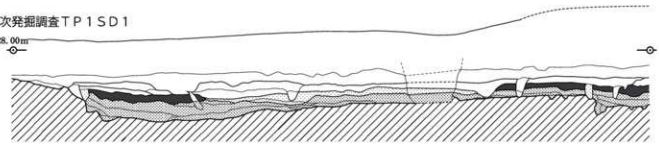
基本土層のⅣ層とは、明褐色を主体とする粘質土で炭化物の混入は顕著ではない。色調は比較的把握しやすく、西岩野遺跡の大部分でみることができ、後世の削平を受けていない部分では20～30cmほどの厚さの堆積を確認できる。第２次調査の報告では第Ⅲｂ層明褐色土層としたもので、その上の第Ⅲａ層黒褐色土層と下の第Ⅲｃ層暗褐色土層とともに弥生時代後期後半の遺物包含層と捉えていたものである。この明褐色土層は以後の調査でも確認することができ、第５次調査では第Ⅲ層とした。今回、第６次と第７次の調査とこれまでの調査の基本土層を再検討し、Ⅳ層とした（第Ⅲ章）。このⅣ層の上下で遺構や遺物の状況に一定の傾向を見て取ることができた。西岩野遺跡で見つかる古代から近世の遺構はⅢ層より上位から掘りこまれたもので、これを上層遺構としたい。古墳時代以前の遺構は、Ⅳ層の上位から掘りこまれるものとⅣ層の下位のものがある、前者を中層遺構、後者を下層遺構とする。

下層遺構の主なものには、第２次発掘調査のＳＤ57、第６次発掘調査ＴＰ１とＴＰ３のＳＤ１やＴＰ２

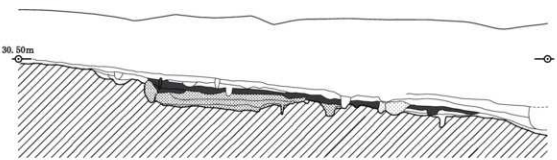
第２次発掘調査ＳＤ－57



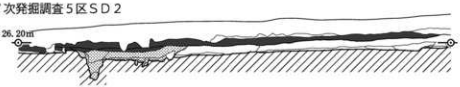
第６次発掘調査ＴＰ１ＳＤ１



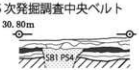
第６次発掘調査ＴＰ２ＳＤ７



第７次発掘調査５区ＳＤ２



第５次発掘調査中央ベルト



中層遺構　下層遺構　Ⅳ：明褐色粘質土

0　(1：100)　10m

第７図　第Ⅳ層堆積状況と遺構

のＳＤ７、第７次発掘調査５区のＳＤ２がある。２次ＳＤ 57 は、最大幅 4.64 m、深さ 1.54 mで、断面形態は半円形の溝で、報告では「大溝」とされた。おおむね東西方向に直線的に伸び、最大延長約 13.4 m を確認した。覆土は、黒褐色土と地山に由来するとみられる黄褐色土が交互に堆積している。溝の上面は完全にⅣ層に覆われており、その下位の黒褐色土層は報告ではⅤ層に対比されている。この溝が機能していた時期を示す遺物は出土していないが、報告では弥生時代後期後半に近い時期のものと想定している。

第６次発掘調査のＳＤ１は岩野台地の北側斜面中腹の平坦部に東西方向に掘られており、深さ１m前後の溝と想定しているが、片側の立ち上がりは確認できていない。溝とすれば幅 15 mを超えるものである。ＴＰ１からＴＰ３にかけて続いており、延長は約 13 mを確認した。弥生時代後期後半の土器が出土したが、これは上部から掘りこまれた遺構に伴うものであった。ＴＰ２のＳＤ７も東西方向に掘られたとおり、幅４m、深さ 40cm の溝状を呈している。ＳＤ１がある平坦面と丘陵頂部の中間の斜面部に掘られている。第７次発掘調査５区のＳＤ２は幅６m前後で、深さ 50cm、丘陵頂部の北側縁辺にあり、これも東西方向に掘られている。いずれも上面をⅣ層に覆われており、これらも覆土に遺物がほとんど含まれていないため、遺構の帰属時期が明確にできていない。

Ⅳ層上面から掘りこまれたことを確認できた主な中層遺構には、第２次発掘調査で土坑状遺構としたＳＸ 50 がある。第２次発掘調査ＳＤ 57 を覆うⅣ層上面で検出された直径 1.6 mの円形で深さ 0.2 mの浅い土坑である。覆土から弥生時代後期後半の土器や碧玉、軽石、炭化した種子等が出土した。

第５次発掘調査のＳＢ１の柱穴は、土層観察ベルトでⅣ層上面から掘りこまれていることを確認したもので、弥生時代後期後半の土器が出土している。また、柱穴覆土から採取した炭化物のＣ 14 年代も同様の時期を示している。また、円形周溝状遺構としたＳＺ１の周溝もⅣ層上面から掘りこまれていることを事前の確認調査で確認した。

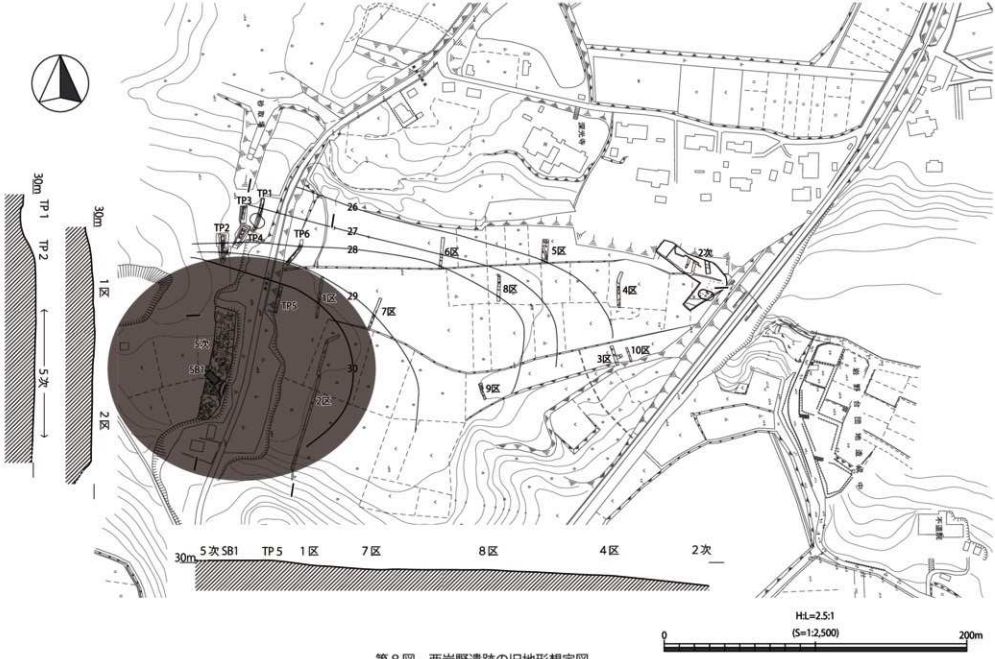
第６次発掘調査では、ＴＰ１でＳＤ１を覆うⅣ層上面から掘りこまれた大型の遺構があり、そこから弥生時代後期後半の土器がまとまって出土した。また、遺構から出土したものではないがＴＰ２ＳＤ７を覆うⅣ層の上面でまとまって弥生時代後期後半の土器が出土している。これらⅣ層上面から掘りこまれた中層遺構には弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺物が伴っており、遺構が構築された時期をある程度限定することができる。

環濠とした５次ＳＤ 48 ではⅣ層との関係を確認することはできなかったが、覆土の中層から下層で弥生時代後期後半の土器が出土した。上層からは古代の土器が出土しているが、遺構内にⅣ層の堆積は認められないことから、埋没しきらなかった窪みに古代の遺物が混入したものと考えている。

大型の遺構を覆うⅣ層は、遺跡の広範囲で確認することができる。どのような要因で堆積したものか明らかにできないが、この層の上下で明確な時期差があると考えられる。そのため、中層の５次ＳＤ 48 と下層の２次ＳＤ 57 等の溝状の遺構群は同時期には存在せず、これらの溝が集落を囲む環濠という当初の想定は誤りであったことがわかった。中層の遺構は弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした時期のものであることは確認できたが、下層の遺構については時期を特定できる遺物が出土しておらず、これらが構築された時期を明らかにすることが今後の課題である。

２） 西岩野遺跡の旧地形

第Ⅱ章で記した通り、岩野台地は数メートルから数十メートルの厚さの新砂丘砂に覆われている。荒浜砂丘で砂丘の堆積が始まるのは古代以降とされるが、西岩野遺跡では砂丘砂層の下に古代から中世の



第８図　西岩野遺跡の旧地形想定図

遺構が埋まっている。そのため、岩野台地で砂丘砂の堆積が始まるのは近世頃であると考えられる。この砂丘砂に覆われたことにより、西岩野遺跡で主体となる弥生時代後期から古墳時代前期の地形は現代のものとは大きく異なっており、現況から当時の地形をうかがい知ることはできなかった。しかし、これまでの発掘調査により、部分的ではあるが広い範囲で基盤層となる第Ⅵ層を確認することができた。これらの成果を基に新砂丘砂が堆積する以前の地形を想定し復元したものが第８図である。

この想定では、図にアミをかけた第５次発掘調査区を中心とした部分が岩野台地の最高所であり、広い平坦面となっている。この平坦面の北側は等高線が密になっており、現況より急な斜面となっている。東へはしばらく緩やかな斜面で下っていき、第２次発掘調査区付近で急に高度が下がる。西側は調査を行っていないが、現在は畑として使われている平坦面が約 50 m続いており、旧地形も同様であったとみられる。北西へ向かっては高度を上げて荒浜砂丘に続いているが、この付近では相当の厚さで砂丘砂が堆積していると考えられる。そのため、本来の地形を想定することは難しいが、現在の様相とは大きく異なっていることが想定される。台地の南側についても今回は調査を行えなかったため、平坦面がどの程度広がっていたかは不明である。台地中央北側では、現在は平坦面となっているところの多くが緩斜面となっていることがわかった。台地頂部の平坦面は現況よりかなり狭いものであったことを確認できた。また、岩野遺跡が所在する台地の東側では、砂丘砂の堆積はほとんど見られないとされ、当時の地形は現在のものに近かったと考えられる［柏崎市教育委員会 1980］。

３　西岩野遺跡の遺構

１）　中層遺構の分布

西岩野遺跡においてⅣ層の上位に築かれた中層の遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期を中心とした時期のものである。第７次発掘調査では、限られた範囲で行ったトレンチ調査であり、また、Ⅳ層上面で遺構精査を行わなかったため、確認できた遺構は少なかった。また、この調査の大きな目的であった５次ＳＤ 48 の延長を検出することもできなかった。台地中央の平坦部に想定していた住居等も確認することができず、遺物の出土量からもここに居住域があったとは考えにくいものであった。９区では墓壙の可能性がある長方形の土坑を検出した。しかし、このような遺構が群を構成して第５次発掘調査のものと別の墓域を形成するものかは明らかにできなかった。結果としては西岩野遺跡の集落の様相を明らかにすることはできなかったが、台地上のほぼ全域に遺構が分布していることを確認できた。ここでは前項で想定した旧地形を基に、弥生時代後期後半の西岩野遺跡の空間利用について、現段階で分かっていることについてまとめる。

第５次発掘調査の調査区は、岩野台地の最高所である平坦面のほぼ中央を占め、ここに大型掘立柱建物、方形周溝墓と土壙墓からなる墓域、環濠とした溝が見つかった。大型掘立柱建物は独立棟持柱が伴うかの判断が分かれているが、その有無にかかわらず住居や一般的な倉庫とは異なる特殊な性格を帯びているものと考えられる。この建物の北側には方形周溝墓と土壙墓からなる墓域となっており、そのうちの１基の方形周溝墓には勾玉、管玉、ガラス玉が副葬されていた。環濠としたＳＤ 48 はこの平坦面の中央付近に位置しており、集落を囲む環濠とは異なる性格のものであることが考えられる。大型掘立柱建物の周囲には竪穴住居や平地式住居は確認できず、生活空間として利用されていた様子は見られない。

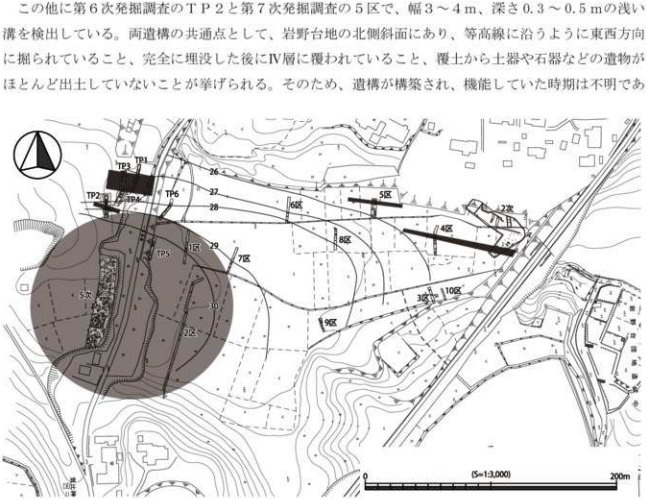
西岩野遺跡で確認されている住居は第２次発掘調査のＳＩ 60 の一棟だけである。この住居から２m

離れた土坑状のＳＸ50からも弥生時代後期後半の土器や緑色凝灰岩などの石材がまとまって出土するなど、一定期間居住していたことがうかがわれる。その他に第６次発掘調査のＴＰ１のＳＸ０はⅣ層の上位から掘りこまれた大型の遺構で、ここでもまとまった量の土器が出土しており、住居の可能性があると考えている。第２次発掘調査のＳＩ60は岩野台地中央の標高が下がったところに作られており、第６次発掘調査のＳＸ０も丘陵頂部より約３ｍ低い部分にある。丘陵頂部を囲む斜面中腹の平坦地を選定して居住域を形成していたことが想定される。台地中央に広がる平坦面では、遺物は少ないながらも出土しており、遺構も散在しているが、様相を明らかにすることができなかった。さらに調査範囲を広げるとともに、Ⅳ層上面で遺構を確認することが必要である。

２） 下層遺構の分布

Ⅳ層に覆われた下層遺構を遺跡の広い範囲で確認した。いずれも溝状の遺構だが、その規模や形状は様々である。最も大きなものは第６次発掘調査のＴＰ１とＴＰ３で検出したＳＤ１である。南側の立ち上がりを確認できていないが、深さ１ｍ前後で幅15ｍを超えており、溝状の遺構と想定している。２次ＳＤ57も最大幅4.6ｍ、深さ1.5ｍと大規模な溝だが、この西側の第７次発掘調査の４区では小規模な溝に変化している。溝底の標高は第２次発掘調査区で21.9ｍ、第７次発掘調査区で26.4ｍであり、両地点は約50ｍ離れており、単純に傾斜を求めると約５度の急勾配となっている。両者には規模や形態に大きな差異があり、一連の遺構と捉えられるのか、またどのような性格を帯びたものかさらに検討が必要である。

この他に第６次発掘調査のＴＰ２と第７次発掘調査の５区で、幅３～４ｍ、深さ0.3～0.5ｍの浅い溝を検出している。両遺構の共通点として、岩野台地の北側斜面にあり、等高線に沿うように東西方向に掘られていること、完全に埋没した後にⅣ層に覆われていること、覆土から土器や石器などの遺物がほとんど出土していないことが挙げられる。そのため、遺構が構築され、機能していた時期は不明であ



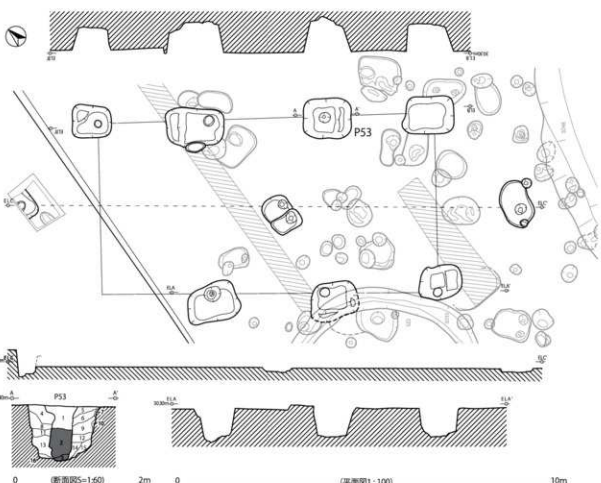
第９図　西岩野遺跡の下層遺構の分布

り、その目的とあわせて今後解明していくことが課題である。

3） 大型掘立柱建物

これまでの発掘調査で断片的ではあるが、西岩野遺跡の旧地形と遺構の分布状況を把握することができた。これを基に弥生時代後期の大型掘立柱建物の立地と性格について検討したい。

まず、西岩野遺跡の大型掘立柱物の特徴について確認する。第５次発掘調査でＳＢ１とした掘立柱建物は、梁行き１間（4.6 m）、桁行３間（8.9 m）、床面積 40.94 ㎡で、弥生時代としては大型とされるものである。建物の主軸は、真北から西へ 45° 傾いている。柱穴の平面形は桁方向に長い長方形で、長辺はいずれも１m以上あり、最大で 1.5 mを超えるものもある。確認面からの深さは最大で１m近くとなる。土層断面で確認できた柱痕の太さは約 40cm である。また、柱穴底面に柱のあたりを確認でき、柱筋を揃えてほぼ等間隔に建てられていたことが確認できた。建物の梁を結ぶ中心軸線上に浅い柱穴があり、独立棟持柱と屋内棟持柱となる可能性がある。ただし、側柱の柱穴が規格的に掘られているのに対し、棟持柱とした柱穴は不正形で浅いことから、両者が同一の建物のものであるとは考えにくいとの意見もある。柱穴埋土中から北陸系の有段口縁甕の口縁部と信州箱清水式土器の甕の口縁部が出土した。また、埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の暦年較正年代は 139 ～ 216calAD の範囲で示されており、弥生時代後期後半頃のものと考えている。独立棟持柱を伴うかについて検証しなければならない課題を残しているが、北部九州から畿内、東海地方などで確認されている弥生時代の大型掘立柱建物と同様のものとなる。



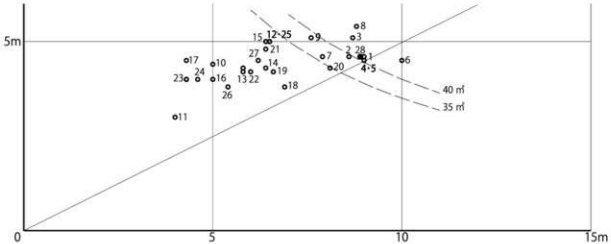
第10図　第５次発掘調査ＳＢ１

この大型建物は岩野台地の最高所にある平坦面の中心部に建てられている。建物の北側には方形周溝墓と土壙墓が散在する墓域が広がっており、最も近接した方形周溝墓とは３ｍ程度しか離れていない。また、副葬品が出土した方形周溝墓との距離も約９ｍと比較的近いことから、同時期に機能したものとは考えにくいとされた。環濠としたＳＤ 48 とも約４ｍしか離れておらず、これとも同時に存在したとは考えにくいものである。前述したように建物の周囲では竪穴住居や平地式住居、倉庫となるような掘立柱建物は確認できず、土器の出土量はそれほど多くないことから、この台地頂部の平坦面に居住域が形成された様子はみられない。以上が西岩野遺跡の大型掘立柱建物である第５次発掘調査のＳＢ１の形態と立地の特徴である。独立棟持柱の有無という建物の性格に大きく関係する要因について明確にすることはできないが、他地域では独立棟持柱を持たない大型掘立柱建物も多くあるとされ、これも特殊な性格を持つ建物であったと考えられるとのことである。

西岩野遺跡の大型掘立柱建物について、同時代の他地域の建物と比較してみたい。弥生時代後期から終末期の東日本の独立棟持柱建物や大型掘立柱建物と比較したものが第 11 図である。弥生時代中期にみられた床面積が 100 ㎡をこえるような超大型建物は弥生時代後期にはみられなくなり、床面積 40 ㎡以上のものを大型建物として扱うことが多い。西岩野遺跡のものも 40 ㎡を超えており、近江地方の伊勢遺跡や下鈎遺跡のものと同等の大きさである。梁行の長さに対して桁行の長さが概ね二倍になる点も近江地域のものと似ている。近江地域に特徴的な大型掘立柱建物を、森岡秀人氏が行った大型建物の分類では「伊勢型」とされている［森岡 2003］。西岩野遺跡のものは平面規模では伊勢型のものに似るが、桁行の柱間数が３間である点や、柱穴に柱を落とし込むための斜路が設けらないなど、細部では異なる部分も多い。伊勢型は大型の柱穴に斜路を伴うことから、「床面積に対し、相当の高さを要求された建物」としている。西岩野遺跡の大型掘立柱建物の柱痕の直径は 40㎝ 前後と一般的なものに比べるとかなり大型といえる。また、柱穴に斜路は設けられていないが、大きく深い柱穴に長大な柱を落とし込むことはできそうであり、一般的なものより高い建物を建てることができたと考えられる。伊勢型と似たような大型建物を建てることはできそうであるが、形態的な特徴だけで直ちに伊勢型のものと結びつけることも難しい。

森岡氏は大型建物の遺跡内での消長や居住区との関係性も類型化している。西岩野遺跡では調査面積が少ないため大型建物と他の建物との関係や建て替えの有無は不明だが、この建物の周囲で現在のところ住居は見つかっていない。森岡氏が「ｂ型」とした「大型建物ないし同建物群が一般の竪穴住居がないか少ない地区を選んで立地しているケース」に当てはまるだろう。設楽博己氏も集落における独立棟持柱建物のあり方をもとに分類を行っており、そのうちの「Ⅱ類）墓域あるいは墓に存在している」もので、「Ａ類）墓域の一角に建っている」としたものに当てはまる［設楽 2009］。

設楽氏は、大型建物が墓域に伴うのは北部九州や南関東地方で多く見られるものだが、両者はその成立過程が異なるとしている。北部九州では特定の墳墓群に大型掘立柱建物が伴い、墳墓群が建物より先行することから、「祭りの対象となるのは大型建物を築いたものにとっての祖先」であり「祭りの対象は特定の個人ではなく集団である」とした。また、南関東地方の大型建物は弥生再葬墓から方形周溝墓へ受け継がれた祖先祭祀的な性格との関連を想定されている。これらに対して、近畿地方の大型建物や独立棟持柱建物が墓や墓域に伴う例はほとんどないことから、居住域に建てられた独立棟持柱建物に祖先の霊を招いて祭ったとしている。伊勢遺跡の大型建物に墓域は伴っていない。西岩野遺跡の大型建物が方形周溝墓や土壙墓からなる墓域に接して建てられている様子は、北部九州や南関東地方のあり方に似ている。大型建物の系譜や役割を検討するには、墓域との時間的な関係を明らかにしなければならない。



NO	遺跡名	所在地	遺構名	桁行(間)	梁間(間)	桁長(m)	梁長(m)	面積(㎡)
1	伊勢遺跡	滋賀県守山市	SB4	5	1	9.0	4.6	41.40
2	伊勢遺跡	滋賀県守山市	SB5	5	1	8.6	4.6	39.56
3	伊勢遺跡	滋賀県守山市	SB7	5	1	8.7	5.1	44.37
4	伊勢遺跡	滋賀県守山市	SB8	5	1	9.0	4.5	40.50
5	伊勢遺跡	滋賀県守山市	SB9	5	1	9.0	4.5	40.50
6	伊勢遺跡	滋賀県守山市	SB12	6	1	10.0	4.5	45.00
7	下長遺跡	滋賀県守山市	SB1	3	1	7.9	4.6	36.34
8	下鈎遺跡	滋賀県栗東市	1992SB1	5	1	8.8	5.4	47.52
9	下鈎遺跡	滋賀県栗東市	1997SB1	4	2	7.6	5.1	38.38
10	黒田遺跡	滋賀県坂田郡近江町	SB02	3	2	5.0	4.4	21.78
11	小谷赤坂遺跡	三重県一志郡嬬野町	SB292	3	1	4.0	3.0	12.00
12	大平遺跡	静岡県浜松市	SH10	3	1	6.5	5.0	32.50
13	大平遺跡	静岡県浜松市	SH35	4	1	5.8	4.2	24.36
14	大平遺跡	静岡県浜松市	SH49	3	1	6.4	4.3	27.52
15	小黒遺跡	静岡県静岡市	1号	3	1	6.4	5.0	32.00
16	小黒遺跡	静岡県静岡市	2号	3	1	5.0	4.0	20.00
17	小黒遺跡	静岡県静岡市	3号	3	1	4.3	4.5	19.35
18	登呂遺跡	静岡県静岡市	SB2001	3	1	6.9	3.8	26.22
19	汐入遺跡	静岡県静岡市	SB01	3	1	6.6	4.2	27.72
20	汐入遺跡	静岡県静岡市	SB02	3	1	8.1	4.3	34.83
21	北川表の上遺跡	神奈川県横浜市	HB14	3	1	6.4	4.8	30.72
22	北川表の上遺跡	神奈川県横浜市	HB22	3	1	6.0	4.2	25.20
23	北川表の上遺跡	神奈川県横浜市	HB19	2	1	4.3	4.0	17.20
24	堀越遺跡	栃木県矢板市		2	1	4.6	4.0	18.40
25	菅俣遺跡	福島県いわき市	1号建物	3	1	6.5	5.0	32.50
26	釜蓋遺跡	新潟県上越市	SB157	3	1	5.4	2.8	15.12
27	古津八幡山遺跡	新潟県新潟市	SB1	3	1	6.2	4.5	27.90
28	西岩野遺跡	新潟県柏崎市	SB1	3	1	8.9	4.6	40.94

設楽2009、鈴木2006、上越市教育委員会2008、相田2019をもとに作成

第 11 図　弥生時代後期の東日本の独立棟持柱建物・大型建物

また、建物絵画土器では２棟以上の大型建物がセットとなりえることが指摘され、切り妻造りと寄棟造りといった屋根構造により建物の性格が異なることなども指摘されている。西岩野遺跡では独立棟持柱が伴うかを明確にするとともに、周辺に他の特殊な建物が伴うかなど検討すべき課題が多く残されている。

４　西岩野遺跡の遺物

１）　弥生時代の土器の分布

西岩野遺跡での第５次発掘調査から第７次発掘調査までの各調査区から出土した土器の量をまとめたものが表３である。この表では弥生時代後期以外のものも含まれているが、弥生時代のものが大部分を占めている。第７次発掘調査区での出土量が特に少ないことは明確である。第６次発掘調査では住居跡とみられるＴＰ１ＳＸ０から土器がまとまって出土しており、他のトレンチに比べて出土量が多い。ＴＰ２では、Ⅳ層上面で壺１個体の破片がまとまって出土している。その他のトレンチでは第７次発掘調査の調査区と同様に出土量が少ない。第５次発掘調査でも調査面積に対して出土量はそれほど多くない。全体の器形をうかがい知れるものは円形周溝状遺構から出土した古墳時代前期の壺だけで、弥生時代後期の土器はいずれも部分的な破片ばかりである。第２次発掘調査の計量データは提示できないが、ＳＸ50の覆土やＳＩ60の周囲で土器が多く出土しており、他の調査区に比べると出土量は多く、遺存率も高い。これまでの西岩野遺跡での発掘調査では一部の遺構からある程度の土器が出土することはあるが、包含層から出土する土器は少ない印象である。廃棄場に捨てられていることも考えられるが、墓域や大型建物からなる聖域といった遺跡の性格に起因することも考えられる。今後明らかにしていきたい課題である。

また、岩野遺跡でも弥生時代後期の土器が出土しており、岩野台地の東側にも集落が広がっていることを想定する必要がある。

表３　西岩野遺跡遺物出土量集計表

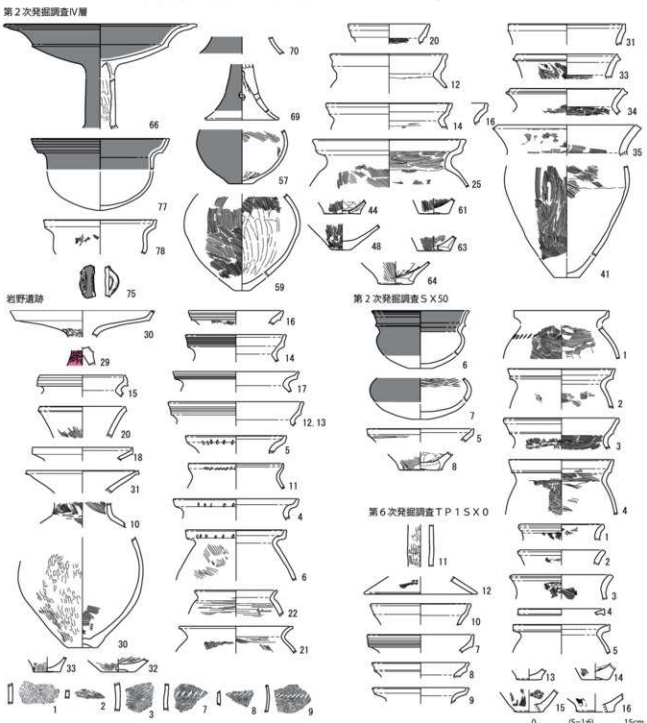
調査区	調査面積(㎡)	土器重量(g)	重量/面積(g)
5次	942.6	13271.0	14.08
6次-ＴＰ１	30.0	1599.0	53.30
6次-ＴＰ２	33.8	531.0	15.71
6次-ＴＰ３	12.5	52.9	4.23
6次-ＴＰ４	11.4	0.0	0.00
6次-ＴＰ５	29.8	0.0	0.00
6次-ＴＰ６	26.0	50.0	1.92
6次-計	143.5	2232.9	15.56
7次-1区	43.4	19.1	0.44
7次-2区	176.6	517.5	2.93
7次-3区	31.9	246.3	7.72
7次-4区	50.1	87.2	1.74
7次-5区	63.8	52.8	0.83
7次-6区	38.2	0.0	0.00
7次-7区	39.0	2.7	0.07
7次-8区	34.1	0.5	0.01
7次-9区	19.6	76.0	3.88
7次-10区	12.9	8.8	0.68
7次-計	509.6	1010.9	1.98
全体	1595.7	16514.8	10.35

２）西岩野遺跡の土器の様相

これまでの西岩野遺跡の発掘調査で出土した弥生時代の土器で遺構から一定量まとまって出土したものは少なく、第２次発掘調査のＳＸ50と第６次発掘調査のＴＰ１ＳＸ０が挙げられる程度である。第２次発掘調査でⅣ層（当時のⅢ層）から出土したものの一部は、ＳＩ60に関係するものと考えられ、周辺グリッドのものを提示した。これらは北陸北東部系のものが大部分を占め、新潟県の土器編年［新潟県考古学会 2005］では２期の後半に位置づけられ、北陸編年の法仏式新段階に相当する。遺構毎に様相の差異が若干あり、第２次発掘調査のものでは、Ⅳ層出土土器に比べてＳＸ50出土のものが新しい様相を見て取れるとしている［品田 2005］]。第６次調査ＴＰ１ＳＸ０から出土したものには、擬凹線をめぐらす有段口縁甕や口縁端部に面をもつ厚手の甕など、第

２次発掘調査のものに先行する特徴があるものが見られる。また、隣接する岩野遺跡で出土した器台や壺などに西岩野遺跡のものより古相を呈するものが見られる。また、中期後半の山草荷式とみられるものも出土している。西岩野遺跡とほぼ同時期とみられる土器が岩野台地の東側にも及んでいることは、集落がここまで広がっていたことを想定させる。さらに、西岩野遺跡のものより時期をさかのぼるとみられるものもあり、集落の成立時期やその後の変遷についても検討する必要がある。

西岩野遺跡は厚い砂層に覆われているため､遺構や遺物の分布に限らず､当時の地形もほとんどわかっていなかった。今回の調査成果から導き出された課題をもとに、今後の調査を効果的に行い、西岩野遺跡の様相を明らかにし、柏崎の地域史の一部を明らかにしていきたい。



第 12 図　西岩野遺跡・岩野遺跡出土の弥生土器

《引用・参考文献》

相田泰臣　2019 「新潟市古津八幡山遺跡を中心とした越後平野の集落」『第２回新潟県考古学講演会「邪馬台国時代前後の越後」』新潟県教育委員会

柏崎市教育委員会　1980 『岩野遺跡　新潟県柏崎市岩野遺跡発掘調査報告書』柏崎市埋蔵文化財調査報告第２

柏崎市教育委員会　1985 『刈羽大平・小丸山　東京電力新潟原子力発電所建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』柏崎市埋蔵文化財調査報告第５

柏崎市教育委員会　1987 『西岩野－新潟県柏崎市長崎西岩野遺跡発掘調査報告書－』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第７

柏崎市教育委員会　1990 『吉井遺跡群Ⅱ－新潟県柏崎市・吉井遺跡群第Ⅱ　期発掘調査報告－』 柏崎市埋蔵文化財調査報告第 13

柏崎市教育委員会　2015 『柏崎市の遺跡 25 －新潟県柏崎市内遺跡　平成 28 年度試掘調査等報告書－』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 83 集

柏崎市教育委員会　2017 『柏崎市の遺跡 27 －新潟県柏崎市内遺跡　平成 25 年度後半期・平成 26 年度前半期試掘調査等報告書－』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 91 集

柏崎市教育委員会　2019a 『西岩野２－新潟県柏崎市　西岩野遺跡（第５次）発掘調査報告書－』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 95 集

柏崎市教育委員会　2019b 『柏崎市の遺跡 29 －新潟県柏崎市内遺跡　平成 30（2018）年度試掘調査等報告書－』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 96 集

柏崎市史編さん委員会　1983 『柏崎市史資料集　地質篇』

柏崎平野団体研究グループ　1979 「柏崎平野の地形発達史と下谷地遺跡周辺の地形」『下谷地遺跡北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』 新潟県埋蔵文化財調査報告第 19

刈羽村教育委員会　1992 『西谷遺跡発掘調査報告書』 刈羽村埋蔵文化財調査報告書第１集

刈羽村教育委員会　2017 『西谷遺跡Ⅱ－源土運動広場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 刈羽村埋蔵文化財調査報告書第５集

設楽博己　2009 「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集

品田高志　2005 「柏崎平野における古墳出現期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会上越市教育委員会　2008 『新潟県上越市　釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』

新潟県教育委員会　1979 『下谷地遺跡　北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告第 19

新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2002 『一般国道８号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ　箕輪遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告第 109 集

新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2005 『上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIX　下馬場遺跡・細田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告第 152 集

新潟県考古学会　2005 『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』

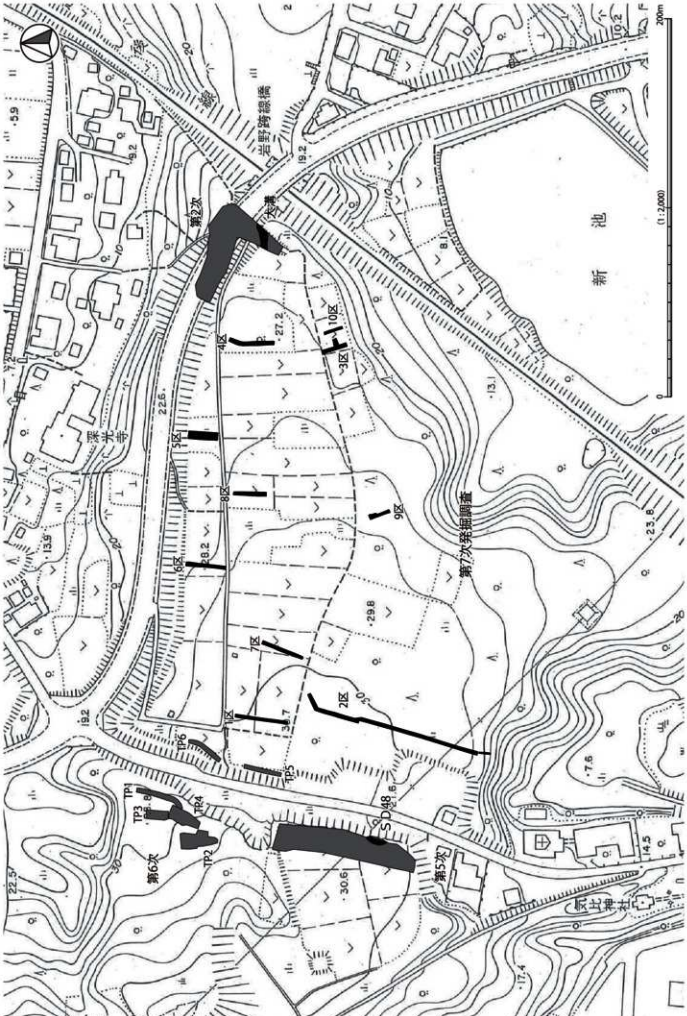
日本考古学協会　2003 「研究発表１　弥生集落における大型建物・方形区画の出現と展開」『日本考古学協会 2003 年度大会研究発表要旨』

広瀬和雄・伊庭功編　2006 『日本考古学協会 2003 年度滋賀大会シンポジウム１　弥生の大型建物とその展開』サンライズ出版株式会社

豆谷和之　2012 「大型建物の性格についての虚実」『月間航行学ジャーナル』 No. 631 ニューサイエンス社

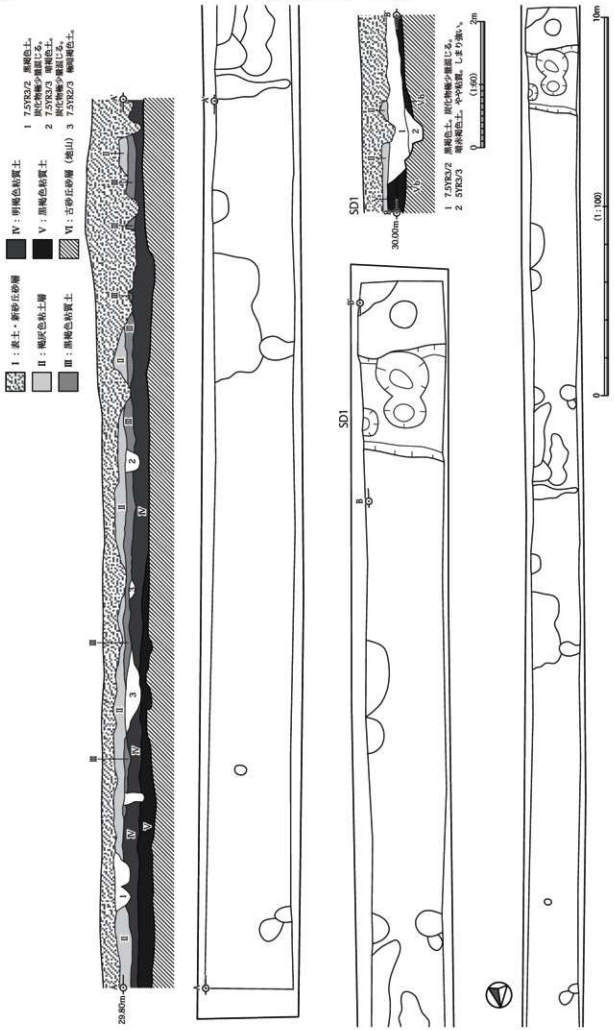
森岡秀人　2003 「近畿の様相」『日本考古学協会 2003 年度大会　研究発表要旨』日本考古学協会

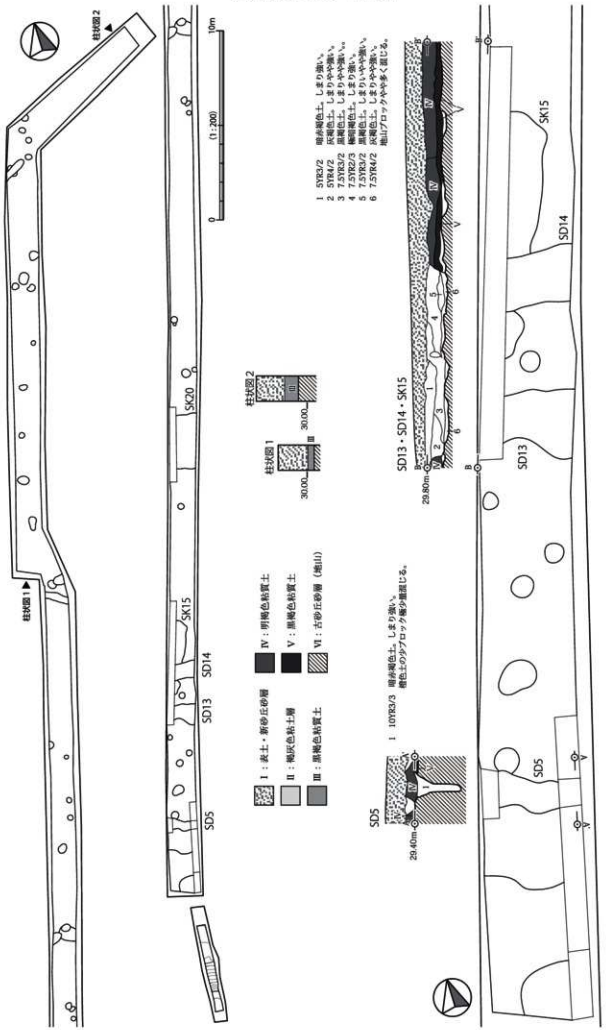
西岩野遺跡第７次発掘調査（確認調査）調査区位置図　　図版１



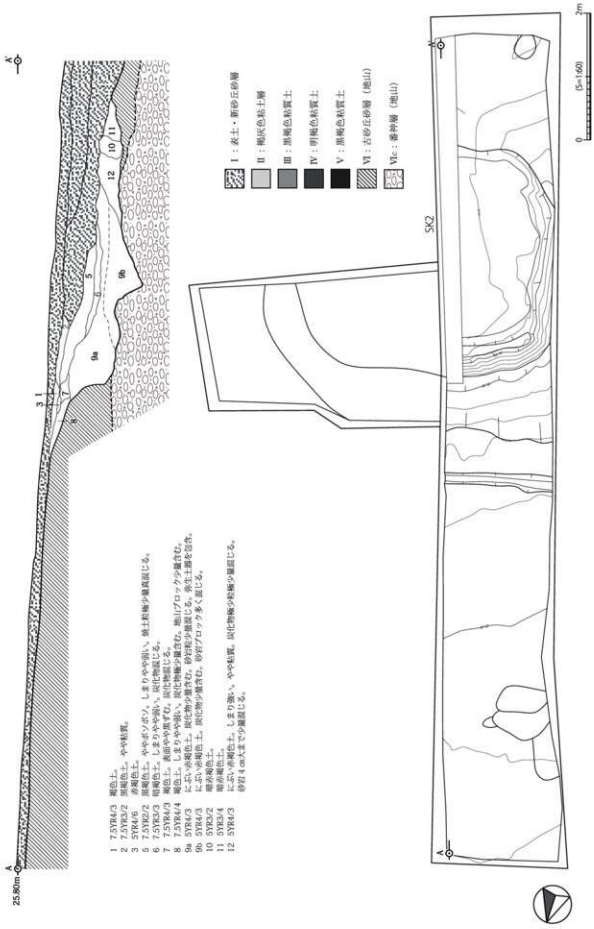
図版 2

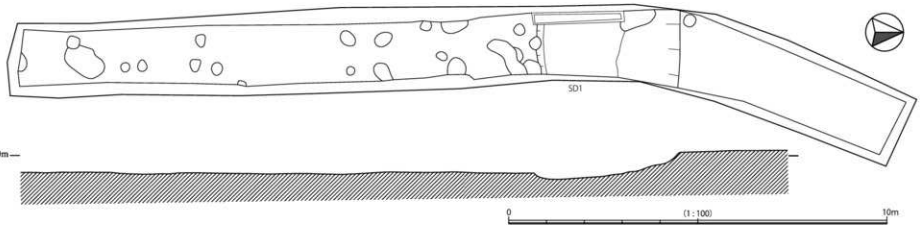
1 区遺構全体図・土層図




柱状図2
柱状図1
10m
(1:200)
SK20
SK15
SD13
SD14
SD5
I：表土・新砂丘砂層
II：褐灰色粘土層
III：黒褐色粘質土
IV：明褐色粘質土
V：黒褐色粘質土
VI：古砂丘砂層（地山）
30.00m
SD13・SD14・SK15
29.80m
1　5YR3/2　暗赤褐色土　しまり強い。
2　5YR4/2　灰褐色土　しまりやや強い。
3　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い。
4　7.5YR2/3　極黒褐色土　しまり強い。
5　7.5YR3/1　黒褐色土　しまりやや強い。
6　7.5YR4/2　灰褐色土　しまりやや強い。
地山ブロックやや多く混じる。
SD5
29.40m
1　10YR3/3　暗赤褐色土　しまり強い。
褐色土のブロック微少混じる。
0　(5=160)　2m

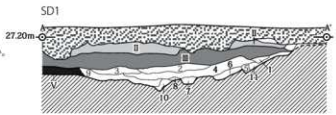
3 区遺構全体図・土層図

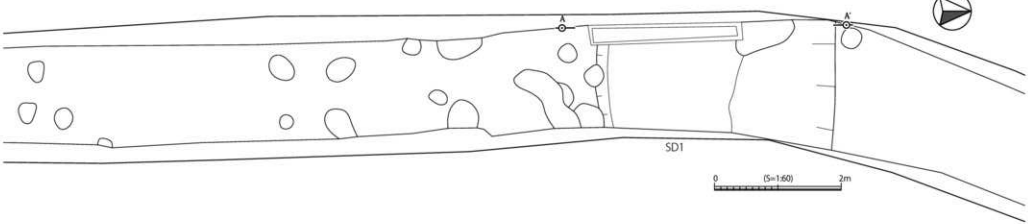

A
A'
25.80m
3 1
7
8
9a
9b
5
6
10
11
12
1 7.5YR4/3 褐色土。
2 7.5YR3/2 黒褐色土。やや粘質。
3 5YR4/6 赤褐色土。
4 7.5YR3/2 黒褐色土。ややボソボソ。しまりやや弱い。他土粒極少量混じる。
5 7.5YR4/3 褐色土。しまりやや弱い。炭化物混じる。
6 7.5YR3/3 暗褐色土。しまりやや弱い。炭化物混じる。
7 7.5YR4/3 褐色土。表面やや黒ずむ。炭化物混じる。
8 7.5YR4/4 褐色土。しまりやや弱い。炭化物極少量混じる。地山ブロック少量含む。
9a 5YR4/3 にぶい褐色土。炭化物少量混じる。砂質が強いため、粘土層を含む。
9b 5YR4/3 にぶい褐色土。炭化物少量混じる。砂質が強いため、粘土層を含む。
10 5YR3/2 暗褐色土。
11 5YR3/4 暗赤褐色土。
12 5YR4/3 にぶい褐色土。しまり強い。やや粘質。炭化物極少量混じる。
砂質が強いため、ボソボソ感混じる。
SK2
Ⅰ：表土・新砂丘砂層
Ⅱ：褐灰色粘土層
Ⅲ：黒褐色粘質土
Ⅳ：明褐色粘質土
Ⅴ：黒褐色粘質土
Ⅵ：古砂丘砂層（地山）
Ⅵa：番神層（地山）
0
2m
(S=1/40)



Ⅰ：表土・新砂丘砂層
Ⅱ：褐炭色粘土層
Ⅲ：黒褐色粘質土
Ⅳ：明褐色粘質土
Ⅴ：黒褐色粘質土
Ⅵ：古砂丘砂層（地山）

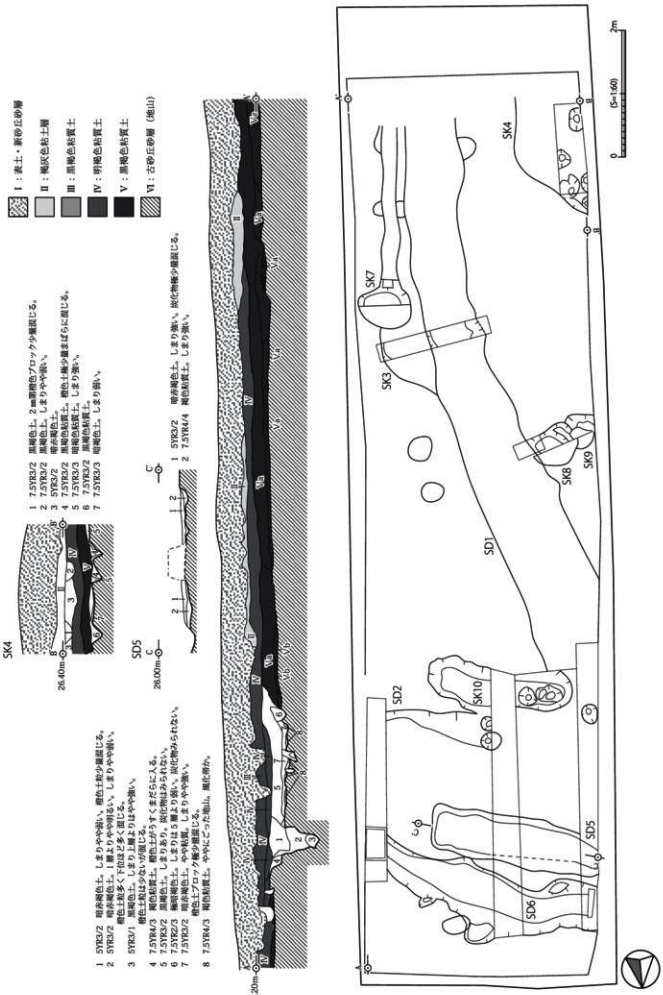
1 5YR2/2 黒褐色土。しまり弱い。
2 7.5YR3/2 黒褐色土。
3 7.5YR3/2 黒褐色土。しまり強い。
4 7.5YR2/2 黒褐色土。炭化物やや少ないが混じる。しまり強い。
5 カク乱
6 7.5YR4/3 褐色土。しまり強い。
7 カク乱
8
9 7.5YR4/2 灰褐色土。地山ブロック少量含む。
10 5YR3/2 暗赤褐色土。しまり強い。

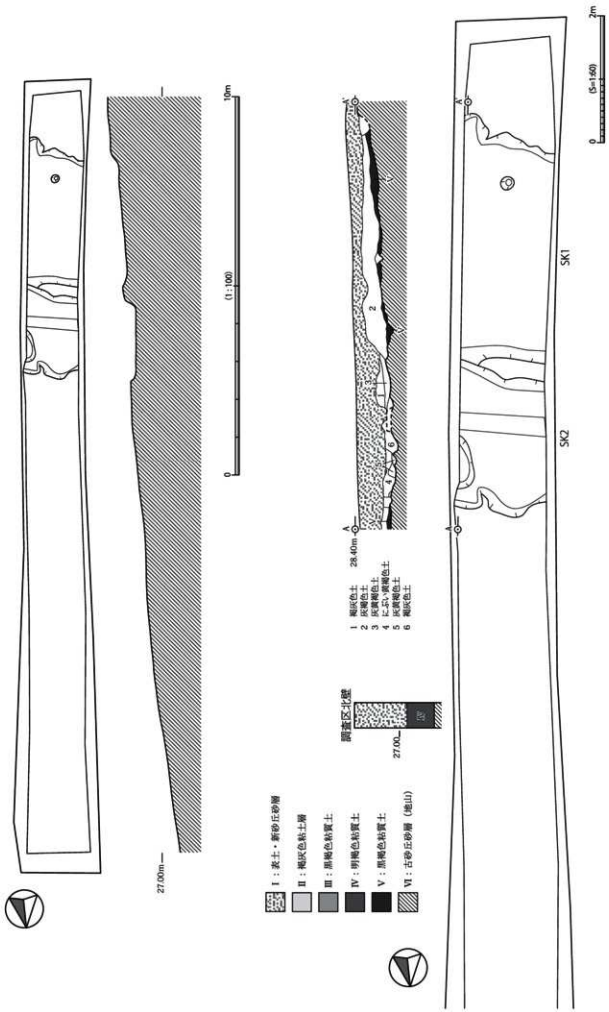




図版 6

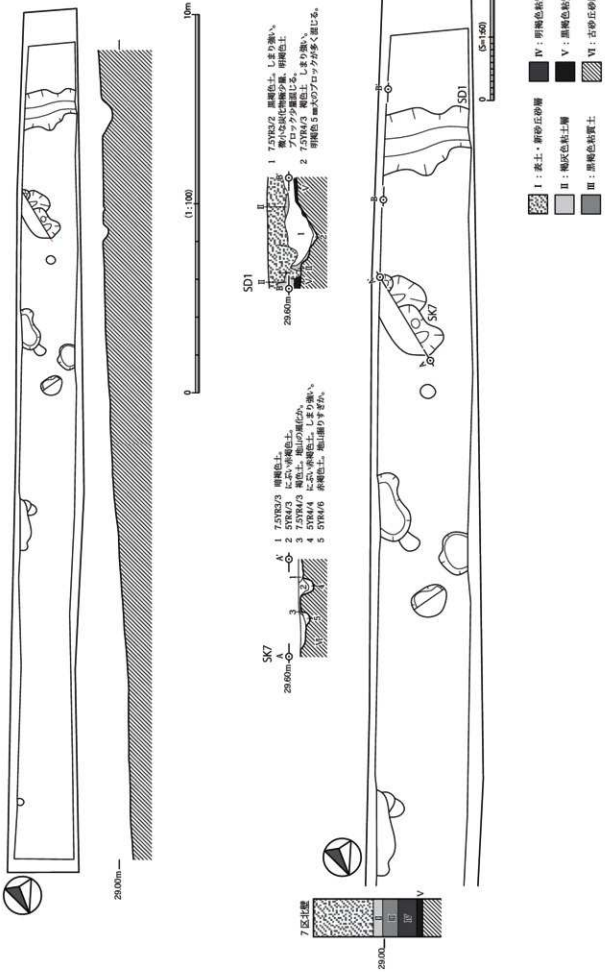
5 区遺構全体図・土層図



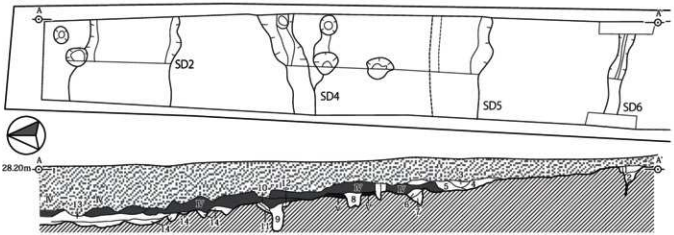

27.00m
0
(1:100)
10m
Ⅰ：表土・新砂丘砂層
Ⅱ：褐灰色粘土層
Ⅲ：黒褐色粘質土
Ⅳ：明褐色粘質土
Ⅴ：黒褐色粘質土
Ⅵ：古砂丘砂層（地山）
調査区北壁
28.40m
27.00m
1　褐灰色土
2　灰褐色土
3　灰黄褐色土
4　にぶい黄褐色土
5　灰褐色土
6　褐灰色土
SK1
SK2
0
(S=1:60)
2m

図版 8

7区遺構全体図・土層図

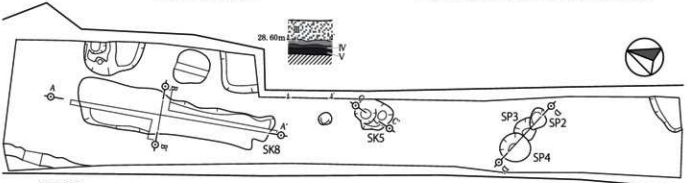


8区

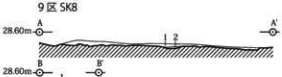


1　7.5YR3/3　暗褐色粘質土。炭化物少量混じる。しまり強い。
2　5YR4/3　にぶい赤褐色粘質土。しまり強い。
3　7.5YR4/2　砂混じり土。1層の潜りか。灰褐色。
4　7.5YR3/2　黒褐色土。しまりやや弱い。
　　地山土小ブロック少量混じる。
5　5YR3/2　暗赤褐色粘質土。地山小ブロック混じる。
6　7.5YR3/3　暗褐色土。しまりやや強い。
　　地山小ブロック少量混じる。
7　7.5YR3/3　褐色粘質土と地山土がまだらに混じる。
8　5YR3/2　暗赤褐色土。しまりやや弱い。
9　7.5YR3/3　暗褐色土。しまり弱い。地山少ブロック混じる。
10 5YR3/2　暗赤褐色土。
11 5YR3/2　暗赤褐色土。
12 7.5YR3/4　暗褐色粘質土。
13 5YR3/1　黒褐色土。
14 7.5YR4/2　灰褐色土。しまり弱い。地山少ブロック少量混じる。

9区



9区 SK8



1　7.5YR3/3　暗褐色土。地山土ブロック多く混じる。
2　5YR4/3　にぶい赤褐色粘質土。

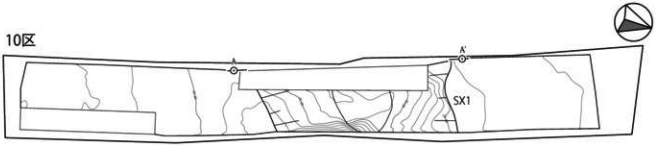
9区 SK5

1　5YR4/3　にぶい赤褐色粘質土。
　　しまりやや弱い。炭化物含む。
2　7.5YR4/3　褐色粘質土。
　　地山ブロック少量含む。

9区 SP2・SP3/SP4

1　7.5YR3/4　暗褐色土。
2　7.5YR4/3　褐色粘質土。
3　7.5YR3/3　暗褐色土。
4　7.5YR3/2　黒褐色土。

10区



10区 SX1

1　10YR4/3　にぶい黄褐色砂
2　5YR4/4　にぶい黄褐色土。炭化物少量混じる。
3　7.5YR5/8　明褐色粘質土。
4　5YR4/2　灰褐色土。炭化物混じる。
5　5YR5/4　にぶい赤褐色土。
6　7.5YR5/4　にぶい褐色土。
7　5YR3/2　明赤褐色土。
8　7.5YR5/6　明褐色土。
9　7.5YR3/3　暗褐色土。
10 7.5YR4/3　褐色土。

0　(S=1:60)　2m

Ⅰ：表土・新砂丘砂層
Ⅱ：褐灰色粘土層
Ⅲ：黒褐色粘質土
Ⅳ：明褐色粘質土
Ⅴ：黒褐色粘質土
Ⅵ：古砂丘砂層（地山）
Ⅵc：番神層（地山）

西岩野遺跡第７次発掘調査出土遺物実測図

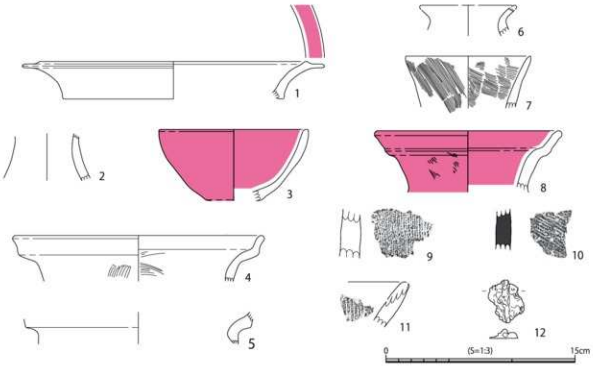


表４　西岩野遺跡第７次発掘調査（確認調査）出土遺物観察表

No	出土地点	種類	器種	法量	調整	色調	胎土	焼成	備考
1	2区 SK20	弥生	高杯	口24.0	内外ヘラミガキ	にぶい橙	精良	良	口縁部上面に帯状の赤彩
2	2区 Ⅲ層	弥生	高杯		外ヘラミガキ	橙	海綿骨針	良	
3	3区 SK2	弥生	鉢	口11.8	内外ヘラミガキ	橙	赤チャート	良	内外面赤彩
4	3区 SK2	弥生	甕	口20.0	外ハケメ内ヨコナデ	明黄褐	長石	良	口縁部外面に煤
5	2区 Ⅰ層	弥生	甕			橙	長石	やや軟質	
6	2区 Ⅳ層	弥生	甕	口18.0	内外ヨコナデ	橙	長石	良	
7	2区 Ⅳ層	弥生	短頸壺		内外ハケメ	黄橙	長石		外面に煤
8	4区	弥生	短頸壺	口14.6	外ハケ内ヨコナデ	明赤褐	長石	良	内外面赤彩
9	5区 Ⅲ層	縄文	深鉢		外撚糸文	明黄褐		良	
10	2区	珠洲	壺甕		外平行叩き	灰		還元硬質	
11	8区 Ⅰ層	越前	擂鉢			橙		酸化硬質	
12	2区 SK20	鉄製品		長3.4幅2.6厚0.8					重5.0 g

a．西岩野遺跡遠景（南から）　（2010 年撮影）

b．調査対象地全景（西から）　手前調査区は第 5 次調査範囲　（2017 年撮影）

a．１区遺構検出状況（南から）

b．１区遺構検出状況（北から）

c．１区北部～中部調査区壁土層堆積（北西から）

d．１区北部調査区壁土層堆積（西から）

e．１区中央部調査区壁土層堆積１（西から）

f．１区中央部調査区壁土層堆積２（西から）

a．１区中央部調査区壁土層堆積３（西から）

b．１区南部調査区壁土層堆積（西から）

c．１区南端部調査区壁土層堆積（西から）

d．１区ＳＤ１遺構検出状況（北東から）

e．２区遺構検出状況（南から）

f．２区南半部遺構検出状況（北から）

a．２区北部遺構検出状況（南から）

b．２区北部遺構検出状況（北から）

c．２区中央部遺構検出状況（南西から）

d．２区中央部遺構検出状況（南西から）

e．２区北部遺構検出状況（南西から）

f．２区南端部遺構検出状況（北西から）

a．２区ＳＤ２検出状況（西から）

b．２区ＳＤ２土層（西から）

c．２区ＳＤ13・ＳＤ14検出状況（北から）

d．２区ＳＤ13・ＳＤ14完掘（南から）

e．２区ＳＤ13・ＳＤ14土層堆積（東から）

f．２区ＳＤ13土層堆積（東から）

g．２区ＳＤ14土層堆積（東から）

h．２区ＳＤ14完掘（東から）

a．２区ＳＤ13・ＳＤ14 完掘（南東から）

b．２区ＳＤ13 完掘（北西から）

c．２区ＳＤ20 検出状況（東から）

d．２区ＳＤ20 検出状況（南西から）

e．２区ＳＤ20 完掘（南から）

f．２区ＳＤ20 土層（東から）

g．２区南側拡張トレンチ完掘（北東から）

h．２区南側拡張トレンチ完掘（南東から）

a．３区遺構検出状況（南から）

b．３区遺構検出状況（北から）

c．３区ＳＫ２遺構検出状況（西から）

d．３区ＳＫ２遺構検出状況（南から）

e．３区ＳＫ２完掘（南から）

a．３区ＳＫ２完掘（南西から）

b．３区ＳＫ２完掘（南東から）

c．３区ＳＫ２土層（西から）

d．３区ＳＫ２土層（南西から）

e．３区ＳＫ２拡張検出状況（北西から）

f．３区ＳＫ４土層（東から）

g．４区中央部遺構検出状況（南西から）

h．４区南部遺構検出状況（南から）

a．４区遺構検出状況（北から）

b．４区ＳＤ１検出状況（南から）

c．４区ＳＤ１検出状況（北東から）

d．４区ＳＤ１完掘（南東から）

e．４区ＳＤ１完掘（北から）

f．４区ＳＤ１上層（東から）

a．５区遺構検出状況（北から）

b．５区遺構検出状況（南から）

c．５区完掘（南から）

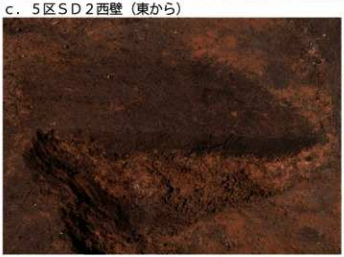
d．５区完掘（北から）

a．５区ＳＤ１検出（南西から）

b．５区ＳＤ１・ＳＫ３土層（北から）

c．５区ＳＤ２西壁（東から）

d．５区ＳＫ８・ＳＫ９土層（北西から）



e．５区ＳＫ７土層（南から）

f．５区ＳＫ４検出（西から）

g．５区ＳＫ４土層（東から）

h．５区ＳＤ２検出状況（東から）

a．５区ＳＤ２完掘（東から）

b．５区ＳＤ２完掘（西から）

c．５区ＳＤ６土層（東から）

d．５区ＳＤ６完掘（東から）

e．５区ＳＤ５土層（南から）

f．５区ＳＤ６土層（西から）

g．５区ＳＤ２土層（西から）

h．５区ＳＤ２完掘（北から）

a．５区ＳＤ１完掘（南西から）

b．５区ＳＤ２完掘（北西から）

c．６区遺構検出状況（南から）

d．６区完掘（南から）

e．６区ＳＫ２完掘（北西から）

f．６区ＳＫ１土層（西から）

a．７区遺構検出状況（南から）

b．７区遺構検出状況（北から）

c．７区ＳＤ１検出状況（南西から）

d．７区ＳＫ７他検出状況（南西から）

e．７区ＳＤ１完掘（西から）

f．７区ＳＤ１完掘（南から）

a．７区ＳＫ７土層（南西から）

b．７区調査区北壁土層（南から）

c．８区遺構検出状況（南から）

d．８区遺構検出状況（北から）

e．８区ＳＤ６検出状況（南東から）

f．８区ＳＤ６完掘（東から）

a．８区ＳＤ６土層（西から）

b．８区ＳＤ６土層（東から）

c．８区ＳＤ２完掘（西から）

d．８区ＳＤ４土層（西から）

e．８区ＳＤ４・ＳＤ５完掘（西から）

f．８区ＳＤ２完掘（北から）

g．８区ＳＤ４完掘（南西から）

h．８区ＳＤ４・ＳＤ５完掘（西から）

a．９区遺構検出状況（北から）

b．９区ＳＫ８検出状況（北から）

c．９区ＳＫ８北側土層（西から）

d．９区ＳＫ８南側土層（東から）

e．９区ＳＫ８東側土層（南から）

f．９区ＳＫ８西側土層（北から）

a．９区ＳＫ１土層（北から）

b．９区ＳＰ２他土層（南西から）

c．９区ＳＫ５土層（北西から）

d．９区ＳＫ５完掘（西から）

e．９区ＳＰ６土層（西から）

f．９区東壁土層（西から）

g．10 区遺構検出状況（南から）

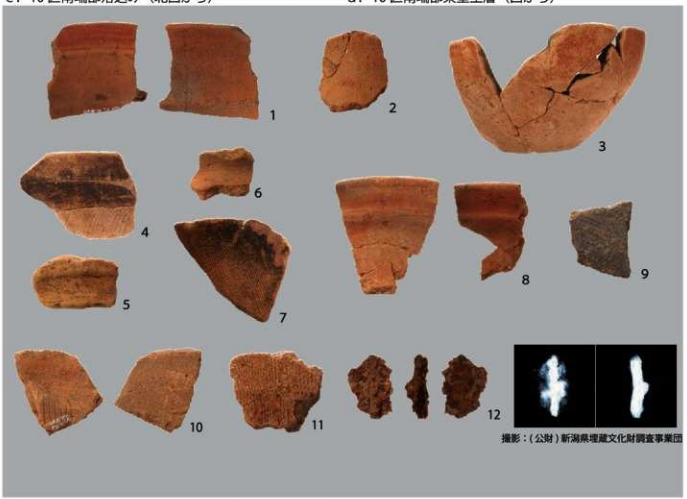
h．10 区遺構検出状況（北から）

a．10 区遺構検出状況（北東から）

b．10 区ＳＸ１土層（東から）

c．10 区南端部落込み（北西から）

d．10 区南端部東壁土層（西から）



e．西岩野遺跡第７次発掘調査（確認調査）出土遺物

a．第２次発掘調査ＳＤ５７東壁土層（西から）

b．第５次発掘調査大型建物柱穴（Ｐ５４）（東から）

c．第６次発掘調査ＴＰ１・ＳＤ１東壁土層（西から）

d．第６次発掘調査ＴＰ２・ＳＤ７西壁土層（東から）

e．第７次発掘調査４区ＳＤ１西壁土層（東から）

f．第７次発掘調査５区ＳＤ１・ＳＤ２西壁土層（東から）

g．第７次発掘調査７区北壁土層（南から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしいわの３
書　　名	西岩野３
副 書 名	新潟県柏崎市　西岩野遺跡　第７次発掘調査（確認調査）報告書
巻　　次	
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第98集
編著者名	中島　義人
編集機関	柏崎市教育委員会（担当：博物館）
発 行 者	柏崎市教育委員会
所 在 地	〒945-8511　新潟県柏崎市中央町５番５０号　　TEL　0257-23-5111
発行年月日	西暦 2020 年（令和２年）３月 25 日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間 西暦年月日	発掘面積 ㎡	発掘原因
西岩野遺跡（にしいわのいせき）	新潟県柏崎市（にいがたけんかしわざきし） 大字山本・土合（おおあざやまもと・どあい） 長崎　地内（ながさき　ちない）	15205	313	37 度 23 分 48 秒	138 度 35 分 49 秒	20180905 ～ 20181015	509.6	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西岩野遺跡	集落跡	弥生時代後期 古墳時代前期 中世・近世	ピット・土坑・溝	弥生土器・土師器 縄文土器・珠洲 鉄製品	西岩野遺跡の想定範囲の全域で遺構・遺物を検出した。

要　　約	西岩野遺跡は、柏崎平野の海岸線沿いに続く荒浜砂丘から東へ突き出た、通称「岩野台地」の頂部に所在する。平成 29(2017) 年度に実施した発掘調査において、弥生時代の大型掘立柱建物が新潟県内で初めて発見されるなど多くの成果があり、注目された。今回の確認調査は、遺跡全体の様相を把握することを目的に実施した。調査は 10 か所のトレンチを設定して行ったが、目的としていた環濠の広がりや居住域の検出には至らなかった。これまでの調査で検出された遺構と土層の検討により、昭和 61(1986) 年度の調査で検出した大溝と弥生時代後期の遺構の構築時期が異なる可能性があることが判明した。

※　緯度・経度は世界測地系に基づく。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第98集

西 岩 野 3

―― 新潟県柏崎市　西岩野遺跡（第７次）発掘調査報告書 ――

令和２（2020）年３月25日　印　刷
令和２（2020）年３月25日　発　行

発　　行　柏崎市教育委員会
〒945-8511 新潟県柏崎市中央町５番５０号
印　　刷　有限会社文盛堂印刷所
〒945-1345 新潟県柏崎市下田尻１３０６番４号